

ユングフラウ鉄道全線開通100周年記念

スイス政府観光局・市立大町山岳博物館 共同企画展



「スイス山岳観光の黄金期と日本人 —その魅力と文化を伝えた人々—」

主 催 スイス政府観光局・市立大町山岳博物館

会 期 2012年7月14日(土)～10月21日(日)

開館時間 9:00～17:00(入場は16:30まで)

会 場 市立大町山岳博物館 特別展示室及びホール

後 援 信濃毎日新聞社 朝日新聞松本支局 中日新聞社 讀賣新聞松本支局

毎日新聞松本支局 産經新聞社長野支局 大糸タイムス株式会社 民友信州

市民タイムス FM長野 SBC信越放送 NBS長野放送 (株)テレビ信州

長野朝日放送(株) 大町市有線放送電話農協

入 場 料 大人400円、高校生300円、小中学生200円

常設展示と共に、30名様以上の団体は各50円割引

講 演 会 ① ミュージアムトーク

7月15日(日)、8月11日(土)・18日(土)、9月23日(日)、10月7日(日)・20日(土)

各日とも 1回目/10:30～、2回目/14:30～

② ゲストトークショー 辰野勇 (冒険家、アウトドアメーカー「モンベル」代表)

9月16日(日) 13:30～15:15

目次

スイス全図 4

1章 スイスアルプスの自然

　　アルプスの国スイス 5

　　アルプスの絶景 6

　　アルプスの動物 8

　　アルプスの花々 10

2章 アルピニズムと山岳観光

　　アルピニズム黄金期と山岳観光 14

　　アルピニズムと芸術 16

　　ユングフラウ地方全図 19

　　ユングフラウ地方と山岳観光 20

3章 ユングフラウ鉄道の誕生

　　山岳観光の発展と鉄道 22

　　ユングフラウ鉄道誕生への軌跡 24

　　ユングフラウ鉄道と登山 27

　　アイガー北壁 29

4章 日本人とアルプス登山

　　加賀正太郎 30

　　横有恒 32

　　秩父宮殿下 34

展示資料解説 38



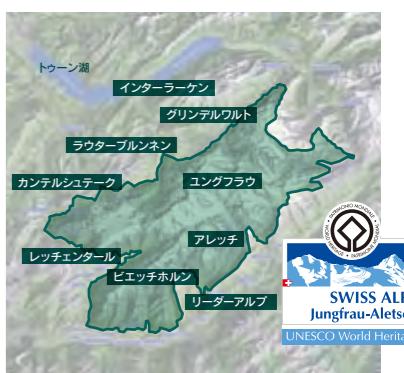
アルプスの国スイス

現在のアフリカ大陸(ゴンドワナ大陸)とユーラシア大陸(旧・パンゲア大陸)とが太古の地殻変動で衝突して隆起してできたアルプス山脈。スイスを中心としてオーストリア、リヒテンシュタイン、ドイツ、フランス、イタリア、スロヴェニアの7カ国にまたがる、長さは1200km、総面積20万kmという大山脈帶です。日本では英名の「アルプス Alps」と呼ばれていますが、独語では *Alpen*(アルペン)といいます。ともに古代ローマ時代に“高い山”を指す言葉であった(後に「山の放牧地」を指すようになった)「アルプ Alp」の複数形が語源と考えられています。アルプスの4000m級の山々のうち、ほとんどが国内または近隣にあることからも分かるように、アルプスの中で最も高所にあたる山岳帯に位置し、国土の6割をアルプス山脈が占めるスイスは、眞のアルプスの国といわれています。



アルプス唯一の世界自然遺産 「スイスアルプス ユングフラーアレッチ」

2001年にアルプス初の世界遺産として登録された「ユングフラウ - アレッチ - ビエッチホルン地域」。ベルン州とヴァレー州にまたがる総面積539km²に、アイガー、メンヒ、ユングフラウというスイスが誇る3名峰とスイス最大のアレッチ氷河を抱く雄大な地域で、多様性のある気候带、高山植物や動物など多彩な生態系、アルプスを代表する貴重な大自然とともに、アルピニズムと山岳観光、登山鉄道、芸術や文学など多くの分野で歴史的に重要な役割を果たしたことも評価されています。2007年には認定エリアが拡張され、ヴェッターホルンやブリュームアルプなどを含む東西にエリアをのばし、総面積も824km²まで拡大。スイスアルプスを代表する世界遺産として分かりやすいよう、登録名も「スイスアルプス ユングフラウ - アレッチ Swiss Alps Jungfrau-Aletsch」に変更されました。2012年に100周年を迎えるユングフラウ鉄道は世界遺産エリアを走っています。



アルプスの絶景

世界に名だたる名峰や、宝石のように美しい湖、雄大な氷河、山の裂け目から流れ落ちる迫力の滝や清らかな小川、四季折々に表情をかえる森、可憐な花々など。スイスでは、アルプスの大自然がつくりだす感動的な絶景の数々と出会うことができます。

アルプスの氷河 Glaciers

古代の地殻変動で誕生したアルプス山脈は、その後に重ねて訪れた氷河期に氷に覆われた氷土となりました。最後の氷河期が終了して気候が温暖化した際に、標高の低い山麓には氷河の浸食により削り取られた地形が谷となり、山間に大きな湖がいくつか形成されました。山頂には当時の氷が氷河という形で残りました。現在、スイスには、総面積約3000km²、約1800カ所の氷河が点在しています。アルプスの山々に残された氷河は、数千万年前に遡る壮大な地球の記憶を留める神秘的な世界です。



アレッチ氷河
Aletschgletscher
全長約23km、面積約80km²、アルプス最長の氷河。周辺の山々とあわせて世界自然遺産に登録されています。アレッチ氷河と総称しますが、実際は、メンヒから続くエーヴィッヒュネーフェルトとユングフラウから伸びるユングフラウフィルン、アレーチホルンの北側に広がるアレッチフィルンという3つの氷河がコンソルディアプラットツで合流し、グロッサー・アレッチグレッチャーにつながっています。



グリンデルワルト上氷河
Oberer Grindelwaldgletscher
メッテンベルグの南西斜面とヴェッターホルンの北東斜面の間に流れる氷河。19世紀半ばまでは村内まで迫っていた氷河も次第に後退してしまいましたが、フィルストへ向かうロープウェイの途中駅ボルトやシェレックフェルトからは、ちょうど真正面にあたる位置で氷河を見ることが出来ます。



グリンデルワルト下氷河
Unterer Grindelwaldgletscher
フィーゼー・ホルンとシュレック・ホルンの間に流れる氷河。グリンデルワルトからロープウェイでブリュック・シュテックまで約2時間歩いたところにあるベーレックから氷河の眺望を楽しむことができます。上級者ならさらに登山道を上っていき、氷河のそばにある山小屋「シュレック・ホルン・ヒュッテ」まで行くこともできます。



フィーゼー氷河
Fieschergletscher (Grindelwald-Fieschergletscher)
同名の氷河が南にあるので紛らわしいですが、フィーゼー・ホルンの北側に広がる氷河。グリンデルワルト下氷河と合流しています。ユングフラウ鉄道のアイスマーメア駅の展望窓からまさに氷の海のように連なる迫力の氷河を見ることが出来ます。

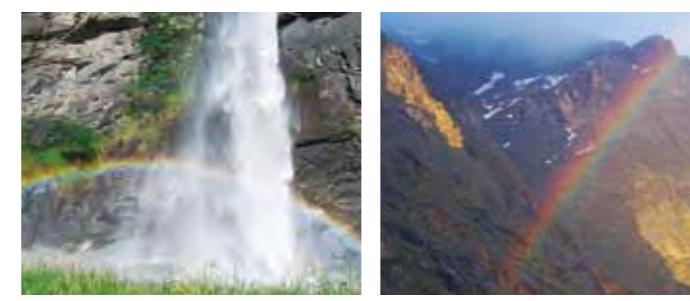
アルプスのご来光 Sunrise

アルプスの夕暮れとともに、美しいご来光も感動的な体験です。漆黒の闇夜から山の稜線を縁取りながら、青、紫、ピンク、オレンジ、黄金色など色を変えて一面を照らしていく朝日。澄み切ったアルプスの空気がさらに研ぎすまされる神々しい時間です。



アルプスにかかる虹 Rainbow

雨が降った後、山に大きくかかる虹や、流れ落ちる滝に光が反射してみえる虹。アルプスの大自然の中にいると、そんな感動的風景に出会うこともあります。



アルプスの夕景 Sunset

山に残雪が残る春や新雪が山頂に積もった秋は、雪山が白いスクリーンのように光を反射して、赤やピンク、オレンジ、黄色などさまざまな色へと変化していきます。まさに大自然がつくり出す壮大な光のスペクタクル。そんな夕暮れの感動的な瞬間はアルプスならではの贅沢な時間です。ドイツ語では、美しい空が赤く染まっていく夕焼けのことを「アーベントロート(夜の赤) Abendrot」といいます。そして、太陽が沈んだ後、雪や岩、水などに光が乱反射することにより、まわりは闇に包まれた中、山頂だけが赤々と燃えるように色づく現象のことを「アルペングリューエン Alpenglühnen※」と表現しています。

※ 独語のグリューエンは炎を出さずに炭や鉄などが赤々と焼けることを示す単語です。



霧や雲海 Fog

山での急な放射冷却によって霧が発生することも、アルプスではよくある自然現象。早朝などに霧でかすんだ山や谷は幻想的です。霧がかなり広域に広がると、山頂からは雲海のようになります。ドイツ語では Nebelmeer(霧の海)といいます。



アルプスの山上湖 Mountains Lakes

スイスアルプスには、小さな山上湖が無数に点在します。鏡のような湖水に雄大な山々の姿を映しとる情景は、感動的な美しさ。ユングフラウ地方には“アルプスの宝石”ともいわれる有名な山上湖があります。そのほか、小さな水たまりのような池や沼でも、周りの山々が映り込むスポットがいくつかあります。



バッハアルプゼー(バッハアルプ湖)

Bachalpsee/Bachsee

ヴェッターホルンやシュレック・ホルン、フィンスター・アール・ホルンの山々や氷河を湖面に映し出す“ミラーレイク(鏡の湖)”として有名な山上湖。フィルストから歩いて約50分の人気ハイキングコースです。



アントゼーヴェン

Antseeuen/Antseeuwen

グロッセ・シャイデックからシュテップフィ Stepfi 方面へ下り、ラウフビュール Lauchbühl まで歩くハイキングの途中にあたるスポット。湿地になっており、小さな沼のような湖が点在しています。



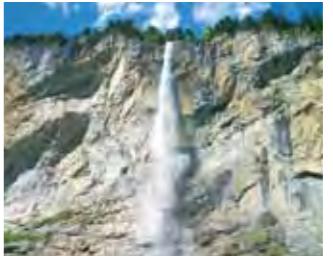
ファルボーデンゼー(ファルボーデン湖)

Fallbodensee

クライネ・シャイデック駅とアイガーグレッチャー駅の間。スキーリフトがあるファルボーデンにつくられた貯水湖。アイガーの真下に位置するため、山が映り込む美しい情景が楽しめます。

アルプスの滝 Waterfalls

アルプスの山々から雪や氷がとけて流れ出す清らかな水。落差のある険しい岩をつたつて落ちる美しい滝は、スイスを代表する絶景のひとつです。さまざまな滝見の旅が楽しめるでしょう。



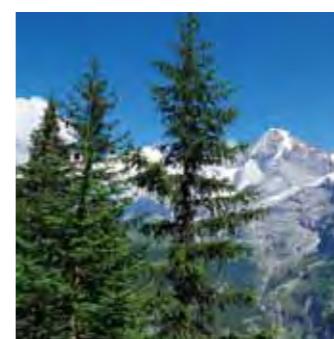
山の沢や小川 Rivers

ライン川、ローヌ川、ドナウ川というヨーロッパを代表する大河の源流となるスイスアルプスの雪解け水は、山中を小さな沢や小川となり流れています。透明度が高い美しい清流もアルプス地方の代表的な絶景のひとつです。



アルプスの森と木々 Forests

国土の約3割を森林が占めるスイスでは、多くの美しい森を訪ねることができます。標高約1300mくらいまでの地域に生育するブナやオーク(櫟)などの広葉樹や、約1900mまでの高さにみられるモミやトウヒ、カラマツ、マツなどの針葉樹林。全国的にみると針葉樹林と広葉樹林が6:4の割合で分布しており、秋には赤や黄色、オレンジなど色とりどりの美しさをみせてくれます。



ユングフラウ鉄道全線開通100周年 ～アルプスをつらぬき、天空へ向かう夢の鉄道の誕生～

アルピニズム黄金期といわれた19世紀末。スイスの山岳地方に各国から多くの観光客が押し寄せてきました。なかでも、アルプスを代表するアイガー、メンヒ、ユングフラウの三名山を有するユングフラウ地方には多くの貴族や財界人、知識人たちがこぞって訪れるようになり、麓の町インターラーケンは、作家アンデルセンが「アルプスのパリ」と称するほど華やかに賑わっていました。1890年には、ラウターブルンネンとグリンデルワルトへ結ぶベルナーオーバーラント鉄道が開通。さらにアイガー直下のクライネ・シャイデックまで結ぶヴェンゲルンアルプ鉄道が1893年に開通しました。そして1896年には「まるで夢物語だ」と揶揄されたユングフラウ鉄道の工事がスタート。莫大な費用と16年の歳月をかけ、アイガー山中にトンネルを通し、ヨーロッパ最高地点の鉄道駅となる標高3454mのユングフラウヨッホ駅まで結ぶ登山鉄道が、ついに1912年8月1日に全線開通しました。



スイス政府観光局・市立大町山岳博物館 共同企画展

ユングフラウ鉄道全線開通100周年記念

スイス山岳観光の 黄金期と日本人

—その魅力と文化を伝えた人々—



スイス政府観光局
www.myswiss.jp



アルプスの動物たち

アルプスでは多くの野生動物を見ることがあります。ごつごつした岩、限られた食料、過酷な気象条件など厳しい環境に適応してたくましく生き延びてきた種です。野生動物は人を警戒しているため、なかなか近くでみることができませんが、遠くの山の岩場などで偶然みかけることもあります。そのほか、アルプ（山の牧草地）で飼育・放牧されている牛や羊、ヤギたちは、スイスアルプスではおなじみの情景。スイスでは、アルプスでの暮らしを支えてきた牧畜の伝統や山の風景を守るために、助成金を出し放牧酪農を保護・推進しています。

アルパイン・アイベックス（独語：シュタインボック Steinbock）

スイスアルプスを代表する野生動物で、大きな角が印象的なアイベックス。ヨーロッパ・アルプスに生息するヤギの一種で、森林限界から雪線までの標高約2000m～4000m付近の険しい岩山で見かけます。大規模な乱獲のため19世紀には絶滅の危機を迎えましたが、国立公園を中心とする熱心な保護活動のおかげで、現在はスイス全国で約15000頭が生息しています。グラウビュンデン州に多く生息していますが、ピラトゥス山でもよく見かけます。ユングフラウ地方では、ハーダー・クルムからブリエンツ・ロートホルン方面へ歩くハイキングコースやアイガーゲッチャー駅の周辺で確認されているほか、アルプス野生動物園で見ることができます。



アルパイン・マーモット（独語：アルペン・ムルメルティア Alpenmulmertier）

スイスアルプス各地でみかけるマーモット。アニメではハイジが「かわいい」と名づけています。警戒心が強く、音に敏感なので、近づくとさっと穴の中に逃げてしまう習性。耳を澄ますと、独特の高い鳴き声が聞こえています。ユングフラウ地方では標高2000m前後の高地に野生のマーモットが広く生息していますが、とくにフィルスト＝バッハアルプゼー、マーモット谷トレイルという名付けられたフィルスト＝グロッセ・シャイデックのハイキングコースでよく見かけます。目撃率が高くなる早朝がおすすめ。



シャモア（独語：ゲムゼ Gämse）

スイスアルプスでおなじみのゲムゼ。日本では仮名であるシャモアChamois(英語も同じ)と呼ばれることが多いようです。スイスカモシカ、アルプスカモシカと紹介されることもありますが、日本のカモシカとは異なる種になります。19世紀後半、乱獲や特殊な病気などで数が激減しましたが、1875年、狩猟を制限する法律が施行され、個体数をモニターするようになり、絶滅の危機は回避されました。現在、スイスにはアルプス山脈とジュラ山脈に、約9万5000頭のシャモア(ゲムゼ)が生息しています。顔に黒っぽい縞模様があるのが特徴。各地で岩場を飛び歩く姿をみかけます。



アカシカ（独語：ロートヒルシュ Rothirsch）

ヨーロッパの鹿の中では、ヘラシカに次ぐ大きさを誇る野生種。かつてはヨーロッパ全土にいましたが、数も少くなり、現在はアルプス地方や東欧が主な生息地です。ユングフラウ地方ではグリンデルワルトの森などに数多くいますが、夜行性のため、昼間はほとんど出でません。



イヌワシ（独語：シュタイン・アドラー Steinadler）

翼を広げると2m以上のイヌワシは、スイスに生息する野鳥の中でも最も大きなもの。驚異の視力で獲物を狙う優れたハンターです。岩のくぼみや高い木の上に巣をつくり、標高約1000m～3000mのアルプス地方に生息。20世紀初めに絶滅の危機に直面し、現在では保護動物の指定種です。ユングフラウ地方では、アイガー、メンヒ、ユングフラウ三名山やハーダー山頂での生育が確認されています。



雪ウサギ（独語：シュネーハーゼ Schneehase）

英語で“山うさぎ”、“アルプスうさぎ”ともいわれる高地に生息する種。独名で“雪うさぎ”という名前のとおり、夏に茶色だった体毛が冬になると雪と同じ真っ白な色に変わるのが最大の特徴です。ユングフラウ地方の山岳エリアに広く生息していますが、警戒心が強く人前に出てくることはないため、なかなか見つけられません。



キバシカラス（独語：アルペンドーレ Alpendohle）

スイスアルプスの展望台などでよく見かけるくちばしが黄色い小型のカラス。英名のアルパイン・チャフ Alpine Choughも独名と同じくアルプスのカラスという意味をもつように、アルプスを中心に標高1500m～5000mの高地に生息する鳥です。ヒマラヤ山脈では他のどの鳥よりも高く標高約6500mのところに巣をつくり、最高ではエベレスト山の標高約8200mの地点で観測されています。



牛（独語：クー Kuh / リント Rind）

現在、スイスには約150万頭の牛が飼育されています。山の上に広がる牧草地（アルプ）での牛の放牧は、今やスイスを代表する風景の一つ。地域によって特徴がありますが、濃厚なミルクで知られるスイスブラウン種はジンメンタール種と並んで世界的に活躍している有名な牛の品種です。アルプの多いユングフラウ地方では、あちこちでのどかに草を食む牛たちをあちこちで見かけます。



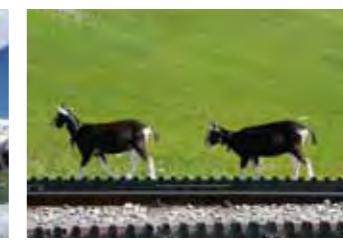
羊（独語：シャーフ Schaf）

羊は、山羊や犬と同じく古代から人々に飼育されてきた代表的な動物です。環境への適応能力に優れているため、アルプスの高地でもよく飼われてきました。ミルクを搾乳したり、羊毛を使ったりと広く役立っています。スイスでは現在、約40万頭の羊がいます。羊は群れをなして生活する習慣があるため、アルプスの牧草地では、よく集団になった羊たちを見かけます。とくにベルン州とヴァレー州の間にある古代の通商の道として知られるゲンミ峠で、7月の最終日曜日におこなわれる「ゲンミの羊飼い祭り」は有名。数千頭の羊の群れがアルプスの峠に集結するさまは圧巻です。



山羊（独語：ツイーゲ Ziege）

現在のスイスアルプスでの高地酪農の中心は牛になっているので、以前ほどヤギの群れを見かけることは少なくなりましたが、小規模農家でも飼えることや、山上での生活に適していることから、かつては山での牧畜の中心でした。130年前には全国で約42万頭いたヤギも現在では約7万頭に減少しましたが、今でも標高の高いアルプでよく放牧されています。



犬（独語：フント Hund）

スイスで最も親しまれている動物は犬です。ペットとして飼われている犬たちは、レストランや電車、ロープウェイなどあらゆるシーンでよく見かけます。アルプスでは牧童の仕事のパートナーとして、牧羊犬が活躍してきました。ユングフラウ地方はその代表格として有名なバーニーズ・マウンテン・ドッグ（独名：ベルナー・ゼネンフンドBerner Sennenhund）の出身地。その名の通りベルン州のアルプスで厳しい環境の中、牧童とともに山でさまざまな仕事をしてきた古い犬種です。黒、白、栗色のつややかな長い毛に覆われたかわいい犬で、今でも現役でアルプの放牧地で牛や羊、ヤギたちと一緒に走っています。そのほか、ハンティングの際にパートナーをつとめる狩猟犬もいます。



山のチーズづくり

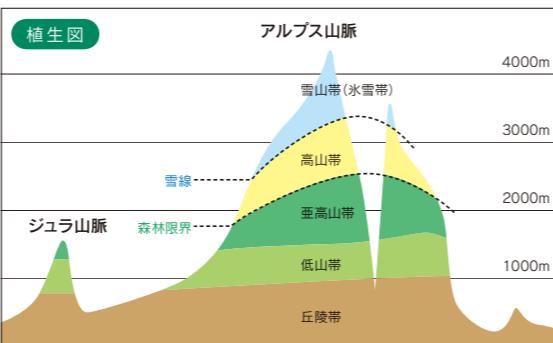
夏の間、牧童たちは牛や山羊、羊たちをアルプと呼ぶ山の上の牧草地に放牧し、高地に育つ柔らかな草を食べさせます。そして綾りたてのミルクを使って、小さな山小屋でベルグケーゼ（山のチーズ）をつくっていきます。昔からチーズは冬を越す貴重な食料で、半年から数年間の長期間保存が続く硬質か半硬質タイプ。紀元前にはすでにアルプスを越えてイタリアに輸出されていたという記録があるほど歴史も古く、古代ローマでは「カゼウス・アルビヌス（アルプスのチーズ）」と呼ばれ、高級品として珍重されていたそうです。スイス全土で数百種類のチーズをつくっていますが、現在でも昔ながらの製法を受け継ぐ山のチーズは人気があり、山岳地方のレストランやホテルの朝食などで味わうことができます。すべてのアルプにチーズ小屋があるわけではなく、放牧して搾乳したミルクをチーズ小屋に売ったり、あるいは各々にミルクを持ち寄り、共同のチーズ小屋でまとめてチーズをつくり、秋になると分配するという伝統も残っています。

アルプスの花々

標高約800mの野原から雪線を越える約4000mの岩地まで、600種類以上の花々が咲くスイスアルプス。険しい岩壁、美しい水が流れる沢や滝、氷河や名峰、森林やアルプ（山の牧草地）など、旅行者たちを感動させる雄大な風景は数多くの種類の花々が咲く生育環境でもあります。とくにユングフラウ地方は、アルプスの各地で良く見られる代表的な種類の花々と希少な種類の花々が同時に咲くという、他の地域にはない特徴があり、古くから多くの植物学者たちが注目してきた地域です。花の種類や咲く場所の環境、標高によって開花期は異なりますが、山を覆っていた雪が解けると同時に多くの花々が咲き誇ります。

高山植物の定義

独語で“アルペンフローラ Alpenflora” “アルペンプランツェン Alpenpflanzen”といわれるアルプスに咲く花々。日本語では“高山植物”と訳されますが、定義はさまざま。スイスでは基本的に、森林限界上にある植物という狭義よりも山々に生育する植物という広義で考えられています。スイスの森林限界は約1800~2500m。地形によっても影響されるため、地域によって森林限界も異なります。アルプス山脈とジュラ山脈で国土の7割を山地が占める山岳国スイスでは、標高約800mの低山帯の下から、約3000~3400mの雪線（万年雪が残る境界）の上まで、幅広い花々が分布しています。



アルプスと高山植物の種類と歴史

古代の地中海といわれるテティス（テチス）海の堆積地が地殻変動で隆起して生まれたといわれるスイスアルプス。約6000万年前まで、一帯は平均気温が約20度という亜熱帯性気候で、ヤシやマグノリアの木々などが生い茂っていた土地です。氷河期になると、ほとんどの熱帯性植物は消えていましたが、「シュネーハイデ Schneehaide (Erica carnea)」や「フラウエンマンテル Frauenmantel (Alchemilla)」などは、かつて樹木だったものが環境に適応し、高山植物へと進化したと考えられています。世界屈指の高山植物の種類を誇るスイスアルプスですが、大半の種が、長い歴史の中で地続きであった大陸から移動してきた種がこの地に適応して発展したもので、数は多くありませんが、ソルダネッレ（ソルダネラ属 Soldanella）、トイフェルクラーレ（フィテウマ属 Phyteuma）、アルペンドスト（アデノスタイル属 Adenostyles）などが、アルプス原産の種です。



まったく同じではありませんが、日本でも同じ種を祖先にもつ高山植物があります。その花々の属名には和名もあるのでよく分かります。例えば、アケライ（オダマキ属 Aquilegia）やロードデンドレン（ツツジ属 Rhododendron）、プリメル（サクラソウ属 Primula）、マンスシルト（トチナイスウ属 Androsace）、エンツイアン（リンドウ属 Gentiana）などは、白亜紀に中央アジアや東アジアからやってきた種です。クロクス（クロッカス属 Crocus）、ナルツツイッセン（スイセン属 Narcissus）、グロッケンブルーメン（ホタルブクロ属 Campanula）は地中海地方や北アフリカから。アスター（シオン属 Aster）、アルニカ（ウサギギク属 Arnica）などはアメリカ大陸からやってきた種です。また、スイス全土が氷で覆われた氷河期にはつながっていたスカンジナビア半島や北極からやってきた植物もあります。「ヴァイセ・ジルバーヴルツ Weiße Silberwurz (Dryas octopetala)」や「アルペン・ヴォルグラス Alpen-Wollgras (Eriophorum scheuchzeri)」「グレッチャー・ハーネンフフ Gletscher-Hahnenfuß (Ranunculus glacialis)」などが代表的なもの。こうして、各地からアルプスに集まってきた植物たちは、度重なる気候変動をたくましく生きのび、独自の進化をとげたのです。そして、約5000年前から人々が山で暮らすようになったことで、さらに植生が変化しました。牛やヤギを放牧するアルプ（山の牧草地）は肥沃な土地となり、麓の野原で咲いていた植物の多くが山地にもあがってきたため、アルプス地方の花々はより種類が豊富になったのです。



高山植物の特徴

激しい温度変化や乾燥、強い風などアルプスの厳しい環境を生き抜くため、さまざまな進化をとげてきた高山植物。背丈が低く小さく地下茎が発達したものが多く、水の蒸発を防ぐために、地表ギリギリで放射線状に並ぶロゼット状の葉や地面に密着したクッション状の葉、ワックスのように表面がコーティングされた葉、革のように堅い葉、産毛のような繊毛に覆われている葉や茎をもつ高山植物をよく見かけます。



活動期間を短く、冬期は休眠状態になるのも重要な寒さ対策です。霜（氷結）を防ぐため、体内の糖度をあげて氷点をさげています。猛烈な暑さにも耐えられるものが多く、直射日光の当たらない岩陰を好んで咲く花もあります。強い日差しと紫外線もアルプスの特徴。そこで、高い抗酸化力を持つようになりました。例えば、エーデルワイスはメラニンを抑制する効果や肌の老化を防ぐ成分を含んでおり、多くの化粧品に利用されています。紫外線に対抗して生成されるフラボノイド（ポリフェノール）は、赤や青、紫、黄色など花のあざやかな色を出す色素もあります。そして、華やかな色は多量の花蜜や強い香りとともに、短い活動期間中に効率よく受粉を成功させるハチや蝶などの虫達をひきつけるためにも役立っています。



高山植物の咲く場所

高山植物の生育場所は、標高にともなう温度など気候条件のほか、土壤や地形に影響されます。アルプスは石英を含む花崗岩などの珪石（シリカ）、苦灰岩（ドロマイド）、片麻岩などの土地もありますが、最も多いのは石灰岩層です。酸性かアルカリ性かを左右する要素で、植物は石灰質を好む種と逆にさける種に分かれます。窒素の量、水分量などの条件でも異なります。多様な環境に広く適応してきたマーガレットやタンポポなどは、例外的に低地から高地までさまざまな場所で見かけますが、通常は、崖や岩が転がるガレ地、やせた草原、肥沃な牧草地、湿地や湧水地、乾燥地、森の中など、決まった場所にそれぞれの生育条件を好む植物たちが集まり、花を咲かせています。



さまざまな色に変化する花々

アルプスの花々には同じ種類でも異なる色で咲くものがあります。例えば、白と紫の花が咲く「フリューリング・クロクス(クロッカス属／学名: *Crocus albiflorus*)」、ピンクや紫のグランツ・スカビオーザ(マツムシソウ属／学名: *Scabiosa lucida*)」、白とピンクの「ゲマイネ・シャフガルベ(ノコギリソウ属／学名: *Achillea millefolium*)」、紅色と青紫の「ベルク・ギュンゼル(キランソウ属／学名: *Ajuga pyramidalis*)」、紫&黄色、白&黄色または白&赤という組み合わせがある「ブックス・クロイツブルーメ(ヒメハギ属／学名: *Polygala chamaebuxus*)」、青紫から薄い紫、稀に白い花が咲く「ペアティゲ・グロッケンブルーメ(ホタルブクロ属／学名: *Campanula barbata*)」など。そのほか、土壤の影響や時間の経過で色が変化していくタイプの高山植物もあります。「フェアギスマインニヒト(ワスレナグサ属／学名: *Myosotis alpestris*)」の種は、リトマス試験紙のように、酸に反応して色が変わるアントシアニンを含んでおり、最初は酸性の細胞液の影響で赤色が入った紫色で、次第にアルカリ性になり青色へと変化していきます。また酸の強い土壤では最初はほぼピンクのような色になることもあります。黄色からオレンジ、赤へと変わっていくのは「アルペン・ホルンクレー(ミヤコグサ属／学名: *Lotus alpinus*)」や「ツイップセン・ヴォルフスミルヒ(トウダイグサ属／学名: *Euphorbia cyparissias*)」など。「グレッチャー・ハーネンフス(キンポウゲ属／学名: *Ranunculus glacialis*)」「ツヴェルク・マンスルート(トチナイソウ属／学名: *Androsace chamaejasme*)」は、白からピンク、紅色に色が変わっていきます。

同種でちがう色を咲かせる花々



時間の経過や土壤の影響で色が変わる花々



雪どけと同時に咲く花々

アルプスの高山植物は活動できる時期が非常に短く、標高2000mで約2ヶ月半、標高3000mでは数週間ということもあります。そのため、動物の冬眠のように、雪の下で緑の葉を保ち、複数年かかるまで花を咲かせるまで成長します。前年の夏にもうすぐ咲く準備になった花々が、翌年の雪どけを待つてすぐに花を咲かせるのです。最も成長が遅い種のひとつが標高約2500~3000mの高所に咲く「グレッチャー・ハーネンフス(水河のキンポウゲ)」。開花まで少なくとも約3年間。2度の夏の間に少しづつ花のつぼみを成長させ、3度目の夏にようやく可憐な花を咲かせます。



「フリューリングス・クロクス(春クロッカス)」「フリューリングス・エンツィアン(春リンドウ)」「フリューリングス・クーシェレ(春アネモネ)」などは、その名通り、アルプスに春を告げる花々です。そのほか、「メールブリメル」や「ローテ・フェルゼンブリメル」など早咲きのサクラソウ属の花、英名でアルプスのスノーベルといわれる「アルペン・ソルダネット」なども、雪どけとともに咲き始める代表的な花々です。

スイスアルプスを代表する高山植物

日本では「エーデルワイス」「アルペンローゼ」「エンツィアン(コッホ・エンツィアン)」を、アルプス三大名花と紹介されたりしますが、“三大”という概念がないスイスでは同様の表現はありません。この白・赤・青色の花はよくお土産品のデザインなどに使われています。



スイスの青少年育成活動組織「プロ・ユヴェントゥーテ *Pro Juventute*」が毎年出している有名な記念切手シリーズでも、1943年から1949年にかけて、スイス人画家ハンス・フィッシャーの絵による<アルプスの高山植物シリーズ>が発行されました。形や色の美しい20種類の特徴的なアルプスの花々が描かれています。



アルピニズム黄金期と山岳観光

絵画や文学の世界で自然回帰、自然礼賛の作品が多く登場してきた18世紀。今まで未踏の地だった大自然を探求するべく、アルプスの山々をめざす人々が増え、アルプスの頂きへの挑戦と旅が始まりました。とくにジャン・ジャック・ルソーやウィリアム・ワーズワース、ウィリアム・ターナーなど人気作家や画家の作品の影響から、イギリスを中心としたヨーロッパの上流階級に、アルプスの魅力が広まり、19世紀後半には、“アルピニズム(登山)”のブームが沸き起こり、スイスのベルナーオーバーラント地方(ユングフラウ地方)のグリンデルワルト、ヴァレー地方のツェルマットを中心にアルピニズム黄金期を迎えます。



「スイス、ルンゲルン湖
The Lungernsee, Switzerland」
ウィリアム・ターナー(1844年)



「青いリギ山、日の出
The Blue Rigi, Sunrise」
ウィリアム・ターナー(1842年)



ジャン・ジャック・ルソー著
「新エロイーズ」挿絵(1840年頃)



「フィンスター・アールホルン周辺でシャモアを追う狩人」
ガブリエル・ロリー(1820年)



レスリー・スティーヴン
(1860年頃)



ジョン・ティンダル
(1860年頃)



エドワード・ウィンパー
(1860年頃)

小説家ヴァージニア・ウルフの父でもあるイギリスの文学史家、思想家のレスリー・スティーヴン Leslie Stephen は、アルピニズム黄金期を代表する存在でした。1860年に標高4206mのアルブフェーベル Alphubel、1861年に標高4078mのシュレックホルン Schreckhorn、1864年に標高4221m のツイナールロートホルン Zinalrothorn など次々と初登頂を成し遂げた彼は、1859年に標高3934m のビーチホルン Bietschhorn に初登頂した時のことを綴った著書を1871年に刊行。そのタイトルにあるように、スイスアルプスを『Playground of Europe(ヨーロッパの遊技場)』として紹介。登山こそが紳士のスポーツと提唱し、新しい流行の立役者となりました。政治家で博物学者のジョン・ボール John Ball、物理学者ジョン・ティンダル John Tyndall や挿絵画家でマッターホルンに初登頂したエドワード・ウィンパー Edward Whymper も同時期に登山家として活躍するとともに著書などを通して広くアルピニズムを広め、黄金期を支えた英国人です。

そして、1811年には標高4158mのユングフラウ Jungfrau、1812年には標高4274mのフィンスター・アールホルン Finsteraarhorn、1850年に標高4049mのピツ・ベルニナ Piz Bernina、1855年には標高4634mのモンテ・ローザ / デュフル峰、1865年には標高4478mのマッターホルンなど、4000mを越えるアルプスの名峰への初登頂に次々と成功していきます。



ユングフラウ初登頂



フィンスター・アールホルンの登山家
(1859年英国発行の山岳書の挿絵)



ピツ・ベルニナ初登頂時のモルテラッチ氷河越えルート



マッターホルン初登頂

大いなる名誉を手にする登山家たちは、巨万の富を誇る貴族や財界人でした。彼らは登山のパートナーとして、アルプスに暮らす屈強な山男たちを雇い、山頂を目指しました。そうして山岳ガイドという職業が誕生し、彼らが滞在するために山小屋やホテルがつくれました。山頂を目指す登山家だけでなく、簡単にアルプスの名峰や雄大な氷河を楽しみたいという人々も多く訪れ、山上には続々と登山鉄道やケーブルが敷設され、アルプス山麓の村々は山岳リゾートとして発展してきました。そしてアルピニズムの黄金期とともに華ひらいた山岳観光こそが、今日の観光立国スイスとしての根柢を支える礎となったのです。

山岳ガイド

アルピニズム黄金期に活躍した登山家たちは、クリスチャン・アルマー Christian Almer、フランツ・アンデンマッテン Franz Andenmatten、メルキオール・アンデレック Melchior Anderegg、フランツ・ビナー Franz Biner、ペーター・クヌーベル Peter Knubel、ウルリッヒ・ラウエナー Ulrich Lauener、ペーター・タウグヴァルダー Peter Taugwalder、など、地元で牧童や狩人として山を駆け回っていた地元の男たちを山の案内人たちとして連れて、山に登りました。そして、1857年にはグリンデルワルト、1858年にはツェルマット、1871年にはボントレジーナに山岳ガイド協会が設立されました。以来、山岳ガイドたちは、現在でも登山だけでなくハイキングやスキー、氷河トレッキングなど、アルプスでのさまざまなアクティビティをサポートしています。



レスリー・スティーヴンと山岳ガイドの集合写真
(1870年頃)



グリンデルワルト山岳ガイドたちの集合写真
(1880年頃)



グリンデルワルトで伝説の山案内人クリスチャン・アルマーと妻のマルガリータ。金婚式に子供たちと一緒に登攀したヴェッターホルンにて(1896年)



山岳ガイドをテーマに描かれた絵はがき(1905年)

現在もアルプス各地で活躍する山岳ガイドたち

スイス山岳会と山小屋

産業革命の成功により経済が発展し、イギリス帝国の絶頂期ともいわれるヴィクトリア朝の英國社交界では紳士たちが趣味に関する情報を交換するサロンが流行していました。世界初の山岳会の発起人となるウイリアム・マシュー William Mathews は、年に一回、仲間で集まって、食事をしながら登山情報を話し合おうと、アルパイン・クラブ(山岳会)の構想を1857年2月に友人宛の手紙に綴っています。そして8月13日、英国人としては初となるフィンスター・アールホルンに登頂の際に、同行者で後に初代会長となるケネディ E. S. Kennedy と話し合い、山岳会を発足。そして1857年12月22日、ロンドン・コヴェントガーデンのアシュリーホテルで11名が参加して最初のクラブミーティングが公式に開催されました。

世界初の山岳会というタイトルは英國に譲ったものの、それから6年後の1863年にはスイスにも山岳会「独語: シュヴァイツァー・アルペンクラブ Schweizer Alpen-Club (SAC) / 仏語: クリュブ・アルパン・スイス Club Alpin Suisse (CAS)」が誕生します。英國山岳会とは異なり、登山ブームの促進という要素だけでなく、アルプスという世界を探求したいという科学的な目的もありました。ガイドの育成、地図の作成、登山道の整備などに従事するとともに、1863年には登山家のために最初の山小屋をテーディ Tödi の山頂に建設、1864年に最初の機関誌『Die Alpen(アルプス)』を発行。1905年にはベルンに山岳博物館を開設しました。現在のメンバーは135000名。113の地区支部に分かれ、スイスアルプスに計9200名収容できる152箇所の山小屋を管理・運営しています。

Schweizer Alpen-Club SAC
Club Alpin Suisse
Club Alpino Svizzero
Club Alpin Svisser



スイス山岳会の最初の山小屋がつくられたテーディ山のビュエルテン氷河を描いたリトグラフ(1880年)



ユングフラウ登山の拠点。1872年、グレッチャーホルン北西につくられた「ロッタルヒュッテ Rottalhütte」



ユングフラウ登山の拠点。メンヒの北西に1874年につくられた「グッギヒュッテ Guggihütte」



1885年、ツェルマットのトロッケナーシュテーク上部につくられた「ガンデックヒュッテ Gandeckhütte」



アルピニズムと芸術～描かれたスイスアルプス

中世の時代には、ゴッタルド峠の難所であるシェレネン峡谷にかかる「トイフェルブリュッケ（悪魔の橋）」の悪魔伝説や、竜や魔女、魔術師が住むといわれたピラトゥス山など、神秘的で美しいアルプスの山は、人知を越えた神や魔の世界として畏敬の念を抱く存在でした。

18世紀になり、ジャン=ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau(1712~1778)をはじめとする自然や科学の探求、文明から離れて自然に回帰する思想を啓蒙するような環境の中で、アルプスの山々は新たな意味を持ち始め、人々の関心を集めていきました。同じく、自然科学の第一人者といわれるアルブレヒト・フォン・ハラー Albrecht von Haller(1708~1777)が、執筆した詩集『アルプス Die Alpen』(1729年)は多くの原語に翻訳され、スイス人のみならず、世界中で幅広い人気を博しました。ゲーテやシラーなど多くの独語圏の文学学者にも多大な影響を与えたといわれています。ハラーはその作品の中で、未だ文明に毒されていない自然の最後の避難所こそが“山”の世界とし、山の美しさと山里に住む素朴な人々を一種のユートピア（理想郷）として紹介しています。

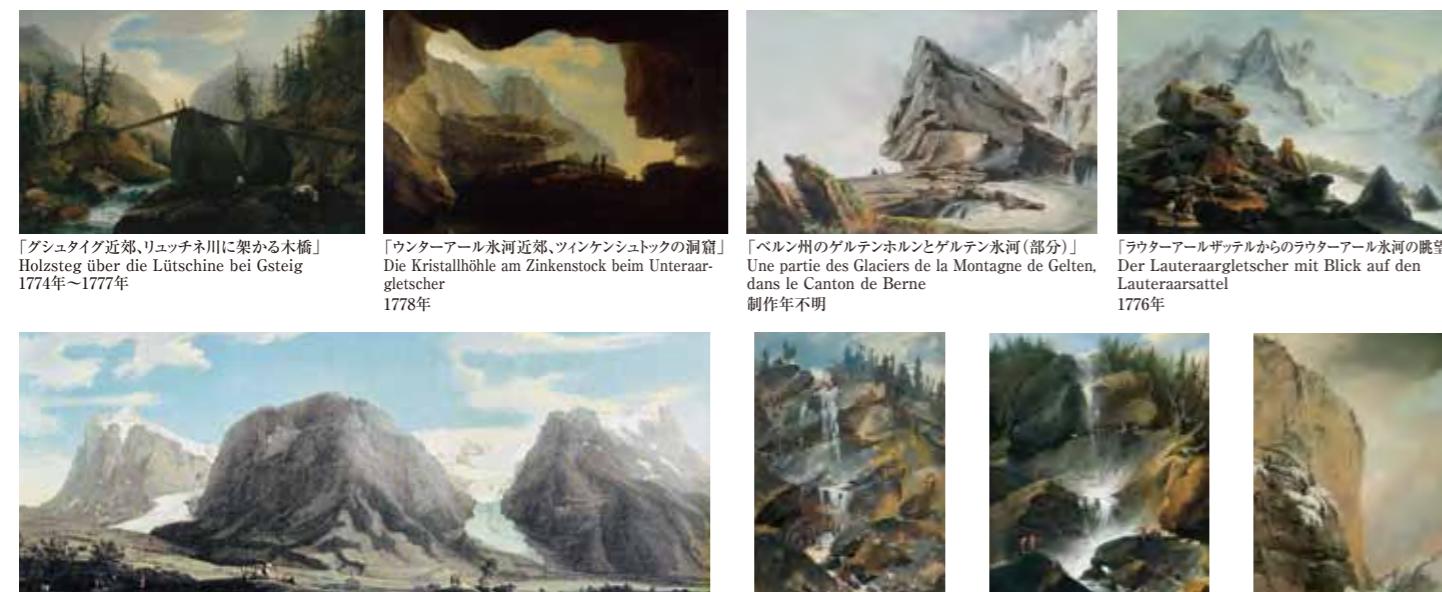


左奥:アルブレヒト・フォン・ハラーの肖像画(1750年／作者不明) 左中:詩集『アルプス』1777年発行版の巻頭ページ
上:詩集『アルプス』1773年発行版の挿絵

自然を賛美し、その憧れを山に求めるといった風潮が広まる中、山岳絵画のパイオニアともいわれるカスパー・ヴォルフ Casper Wolf(1735~1783)が活躍しました。地元の編集者からアルプスの世界を約200点の油彩シリーズとして描き留めるという仕事の依頼を受け、1773年からベルナーオーバーラント地方、ヴァレー地方のアルプスを中心に何度も旅に出かけ、約180点の作品を完成させて発表。地質学者、氷河学者、植物学者など、未知なる大自然を探検、調査するためにアルプスを目指した学者たちに随行し、記録としての作品を残す使命を担っていた彼の作品は、優れた風景というだけでなく、自然科学の貴重な研究報告書であるとともに、18世紀に沸き起ったアルプスへの熱狂と山岳世界の発見の時代を今に伝える文化史的価値をもつ資料にもなっています。そして、絵画の世界でも、それまで背景の一部として描かれてきたアルプス手前の牧歌的な風景や遠望した山の風景ではなく、迫力の大自然が広がる山の世界そのものをテーマに描いた独特の作品が誕生した。それまでになかった、厳しい自然に立ち向かい危険をかえりみずに、アルプス山脈の懐奥深くに足を踏み入れた者だからこそ、描き上げることができた厳しくも壯麗な山の世界に人々は感嘆し、強く心にその憧れを抱くこととなりました。



Gallery | Casper Wolf (カスパー・ヴォルフ)



「グシュタイグ近郊、リュッチネ川に架かる木橋」
Holzsteg über die Lütschine bei Gsteig
1774年~1777年

「ウンターアール氷河近郊、ツインケンシュトックの洞窟」
Die Kristallhöhle am Zinkenstock beim Unteraargletscher
1778年

「ベルン州のゲルテンホルンとゲルテン氷河(部分)」
Une partie des Glaciers de la Montagne de Gelten,
dans le Canton de Berne
制作年不明

「ラウターアールザッテルからのラウターアール氷河の眺望」
Der Lauteraargletscher mit Blick auf den
Lauteraarsattel
1776年

「グリンデルワルト谷のバーマ:ヴェッター・ホルン、メッテンベルク、アイガーとグリンデルワルト上氷河・下氷河」
Halbpanorama des Grindelwaldtales mit dem Oberen und Unteren Gletscher, Wetterhorn, Mettenberg und Eiger
1774年~1776年

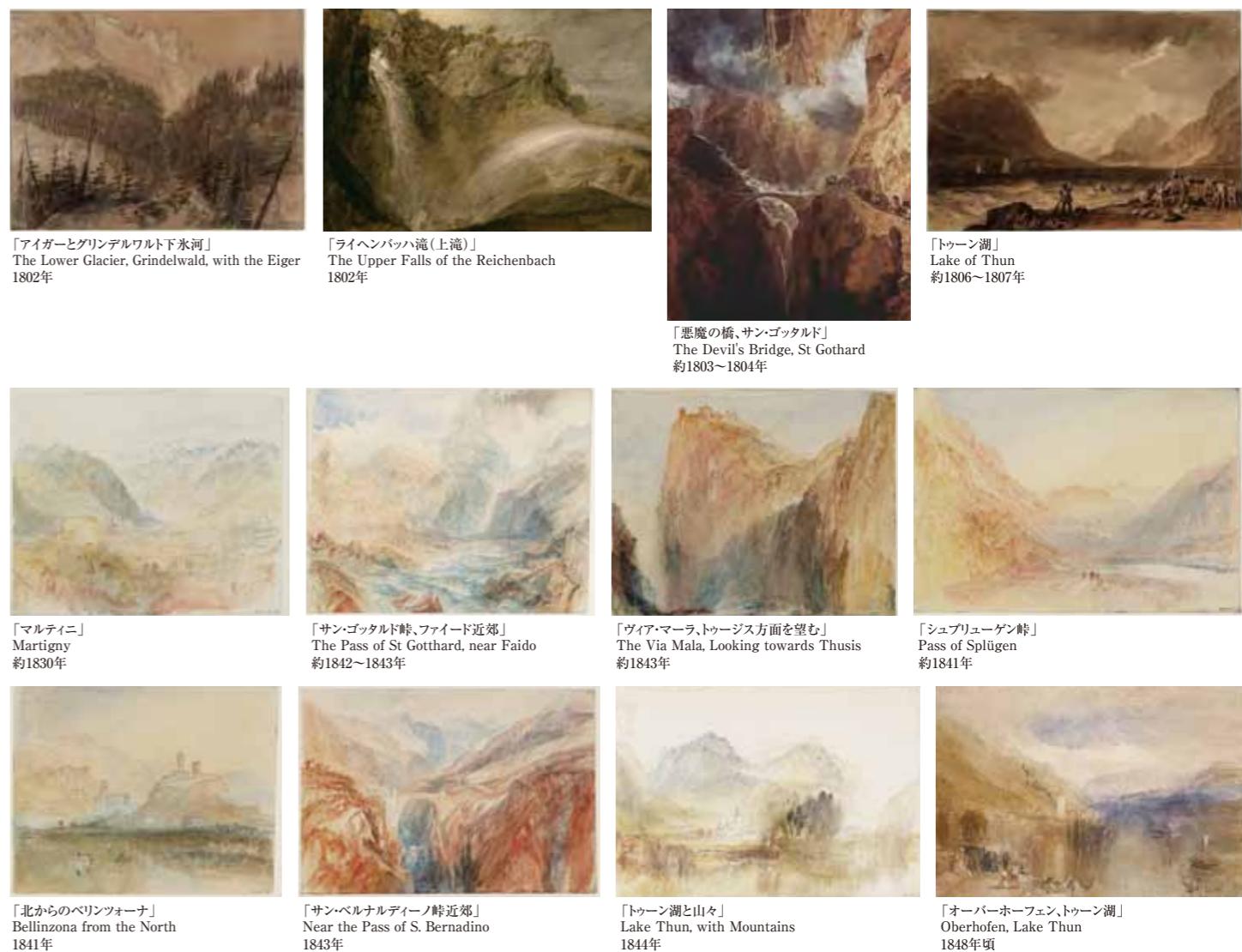
「ラウターブルンネン谷のシタウバッハ(上滝)」
Der Obere Staubbachfall im Lauterbrunnental
1774年~1777年

「ラウターブルンネン谷のシタウバッハ(上滝)の習作」
Studie zu: Der Obere Staubbachfall im Lauterbrunnental
1774年~1777年

「冬のシタウバッハ(下滝)」
Zweiter Staubbachfall im Winter
1775年

若くしてロイヤルアカデミー会員にもなっていたウィリアム・ターナー Joseph Mallord William Turner(1775~1851)は、有力なパトロンにも恵まれ、有名美術批評家のジョン・ラスキンとも親しく、イギリスで人気を博した画家でした。そんな彼がスイスアルプスを何度も訪れ、描いた数々の素描や水彩画、油彩画は、英国での自然礼賛やアルピニズムブームにも貢献したといわれています。

Gallery | William Turner (ウィリアム・ターナー)



アルピニズム黄金期の花形でもあった登山家エドワード・ワインパー Edward Whymper(1840~1911)は、もともと挿絵画家でもあり、ロンドンの出版社からアルプスのイラストを描く依頼をうけ、数々の名峰に登攀しました。そして、マッターホルン初登頂を中心として自身の登山体験を数多くの挿絵とともにまとめた『アルプス登攀記 Scrambles amongst the Alps』を1871年に刊行。英国のみならず、世界各国で反響を呼ぶ大ヒット作品となりました。日本でも秩父宮殿下のアルプス登山に同行したメンバーの一人、浦松佐美太郎が翻訳して1936年に岩波文庫から発刊されています。



「Scrambles amongst the Alps」
表紙
エドワード・ワインパーの描いた挿絵。
マッターホルン初登攀(左)、ダン・プランシュのベルグシュルント(右)

山々は絵画の主題として定着するようになり、風景として写実的な山岳風景だけでなく、19世紀末には、後にクリムトと並び評されるスイス人画家フェルナンド・ホドラー Ferdinand Hodler(1853~1918)やジョヴァンニ・セガントーニ Giovanni Segantini(1858~1899)が、アルプスの山々を題材とした風景画に別の意味を加え、メタファーとして表現することで世纪末芸術、象徴主義的な絵画の世界へと結びつけていきました。20世紀になるとスイス・ベルンに生まれた画家パウル・クレー Paul Klee(1879~1940)やドイツ表現派の画家エルンスト・ルートヴィッヒ・キルヒナー Ernst Ludwig Kirchner(1880~1938)のように、山や山岳風景をモチーフに抽象化した絵画作品を描いています。その後、ポップアートを経て現代アート作品など、山岳絵画が誕生した18世紀から今日まで、さまざまな形で山の世界は表現され続けています。

ホドラーとシニゲプラッテ

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパの絵画界で革新的な役割を担ったスイス人画家フェルディナンド・ホドラー。ベルンに生まれ、早くに両親を亡くした彼は、絵画の世界に入つてすぐ才能を開花させ、高い評価を得るようになりました。一般的には、夜や死をテーマに描いた幻想的な絵画で象徴派画家として知られていますが、実は生涯を通して取り組んでいた風景画こそ、彼の基盤であったといわれています。風景画の制作を通し、自然の摂理や山々の形態、光と色彩の関係などを追求していました。そして次第に、写実主義と象徴主義の間で、彼の風景画は驚くほどモニュメンタルで、時に抽象的であり、内容的に神秘性や宗教性を帯びるようになります。生まれ故郷のベルンや絵画の修業をしたトゥーンに滞在し、ベルナーオーバーラント地方のアルプスや谷、湖の風景を題材に数多くの作品を描いています。



すでに画家としての名声を得ていたホドラーは、同じく象徴派絵画で知られるクリムトなどと親交を深めた1903年のウィーン滞在の後、スイスに戻り、再び、アルプスの風景を取り組みます。とくに湖と山の織り成す構図に興味をもち、1904年からはトゥーン湖をモチーフとして、水面に鏡のように山々が映り込み上下対称となる湖の絵を数多く描くようになりました。

折しも、1893年にシニゲプラッテ鉄道が開通し、山頂から広がるアイガー、メンヒ、ユングフラウの三名山を含むベルナーアルプスの山々や谷を見下ろす眺望が評判となり、多くの観光客でにぎわっていた頃。中腹のブライトラウエネン、そして山頂のシニゲプラッテにはホテルもできました。湖から眺めていたベルナーアルプスの山々を描きたいと思っていたホドラーは、まずは1906年、続いて1908年にシニゲプラッテへのぼり、山頂ホテルに泊まって、幻想的な山々や谷を描きました。当時のスケッチ(デッサン)とともに、後に代表作となる名画の数々がシニゲプラッテで誕生しました。ブライトラウエネンやシニゲプラッテから、ホドラーが約110年前に見た風景を今も見ることができます。

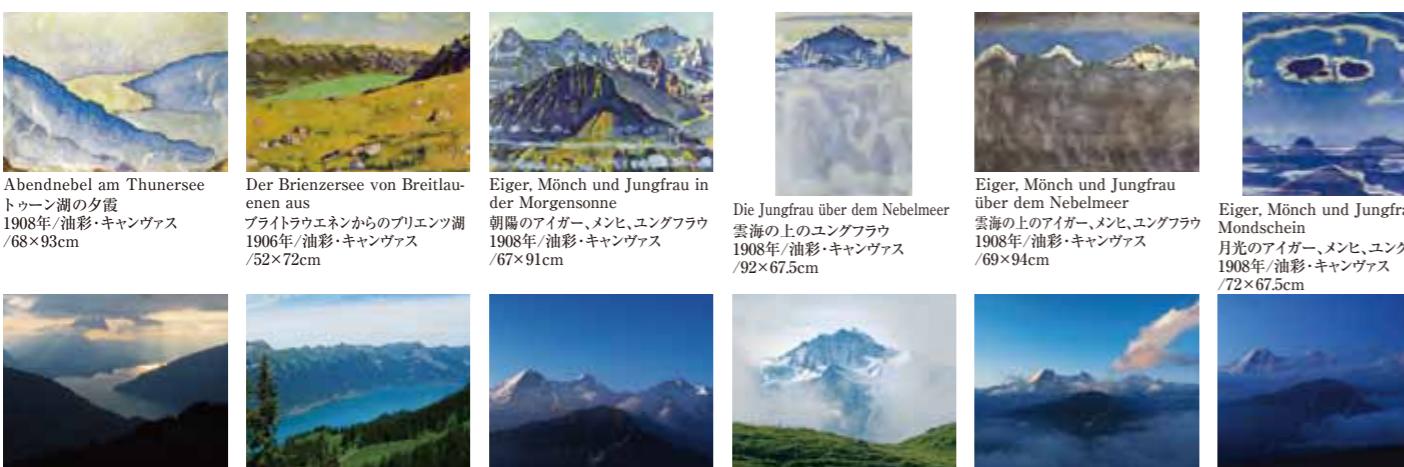


ホドラー展望台

シニゲプラッテ鉄道の中間駅「ブライトラウエネン」。眼下にブリエンツ湖やトゥーン湖が広がる絶景スポットです。レトロな駅舎や、かつては宿だったクアハウス(現在セミナー・ハウス)など、約120年前と変わらぬ姿で残っています。駅から少し歩いたところには、偉大なスイス人画家(フェルディナンド・ホドラー Ferdinand Hodler)の名を冠する展望台があります。巨匠ホドラーによって描かれた名画のままの美しい眺望が楽しめます。



Gallery



ユングフラウ地方マップ Jungfrau Region Map



山岳観光とユングフラウ地方

ベルエボックと呼ばれ、ヨーロッパ全体が華やいでいた時代。アルピニズムや自然賛美のブームと重なり、スイスの山岳地方には、欧米諸国から多くの観光客が押し寄せるようになっていました。その中心地となったのが、ベルナーアルプスを代表するアイガー、メンヒ、ユングフラウを含むユングフラウ地方でした。玄関口ともいえる山麓のインターラーケンは、高級ホテルが続々と誕生し、エレガントな装いの紳士淑女が町を闊歩する世界的有名なリゾート地になりました。登山家たちが訪れる山麓の里には、彼らを受け入れる宿ができましたが、登山鉄道の開通とともに山岳観光が本格的な地場産業となり、1890年に開通したベルナーオーバーラント鉄道が結ぶラウターブルンネンとグリンデルワルトはその中心地として、素朴な村里から世界中からの旅人を迎える山岳リゾートへと発展してきました。そして、約100年以上前に誕生し、栄華を誇った山岳観光の拠点は、今も変わることなく、スイスを代表する人気の観光地となっています。

①インターラーケン Interlaken

ブリエンツ湖とトゥーン湖の間に位置し、2つの湖をアーレ川が結ぶ沖積平野「ベードリ Bödeli」にあり、12世紀に創設された修道院とともに始まった小さな山間の町。ベルナーアルプスの山麓に位置する町で、18世紀から19世紀にかけて、アルプスの名峰をのぞむ山岳リゾートとして発展し、世界に広くその名を轟かせるようになった。バイロンやゲーテなどの文人や、メンデルスゾーン、フーリムなど音楽家、オーストリア皇后エリザベトやルートヴィヒ2世などの王族たちもこぞって訪れていました。優美なホテルや社交場が誕生していました。この地をよく訪れたアドルフ・ゼンが“アルプスのパリ”と贅美したように、エレガントな雰囲気に満ちあふれていました。日本人初となるユングフラウ登攀を成し遂げた加賀正太郎が宿泊した「ヴィクトリア・ユングフラウグランドホテル VICTORIA-JUNGFRAU Grand Hotel & Spa」はその代表的な存在でした。19世紀半ばに創業、町の中心にありユングフラウを正面に眺める宮殿のようなホテルの前にはいつも馬車が並び、テラスでは貴婦人や紳士たちが絶景とともにティータイムを楽しんでいました。



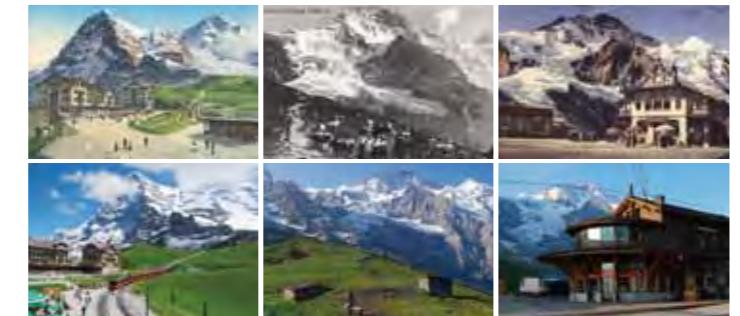
②ラウターブルンネン Lauterbrunnen

氷河によって形成されたU字谷で、崖の上から流れ落ちる70以上の滝や小川があることから、ラウター（音が大きい）ブルンネン（泉）という名前がついています。村のシンボルであるシュタウブバハ瀑布 Staubachfall は、“シュタウブ（塵（ぢり））”という名の通り、細かい霧のような水しぶきをたて、垂直にきり立った岩山の上から落差300mを流れ落ちています。奥にみえる雪山、村の教会、のどかな牧草地が織り成す情景はまさに絵画そのもの。2度目のスイス旅行で立ち寄ったゲーテは、何よりもこの滝に感動したと語っています。その時に書いた詩「水上の精霊の歌 Gesang der Geister über den Wassern」は後にシェーベルトの歌曲になりました。詩人ワーズワースもこの滝の想い出を美しい詩に残しています。1890年に開通したベルナーオーバーラント鉄道でインターラーケンから、1893年に開通したヴェンゲルンアルプ鉄道でクライネ・シャイデックまで結ばれました。



③クライネ・シャイデック Kleine Scheidegg

アイガー、メンヒ、ユングフラウが迫る山麓の地には、鉄道開通前の1840年にすでに「ツア・ゲムゼー Zur Gemse」という宿が誕生しており、フランス人作家のドーヴィーが宿泊し、代表作となる「アルプスのタルタラン」を書いています。その感動的な風景からその宿は“美しい眺望”を意味する「ベルヴュー Bellevue」という名で呼ばれるようになりました。1893年には麓のグリンデルワルト・ラウターブルンネンの両方向から結ぶヴェンゲルンアルプ鉄道が開通し、同年、ベルヴューホテルの横に「ホテル・デ・アルプ Hotel des Alpes」がオープン。続く1898年にはユングフラウ鉄道がアイガーゲッチャ駅まで開通し、気軽に氷河観光や登山を楽しめるようになりました。日本人初となるユングフラウ登攀を成し遂げた加賀正太郎が宿泊した「ヴィクトリア・ユングフラウグランドホテル VICTORIA-JUNGFRAU Grand Hotel & Spa」はその代表的な存在でした。19世紀半ばに創業、町の中心にありユングフラウを正面に眺める宮殿のようなホテルの前にはいつも馬車が並び、テラスでは貴婦人や紳士たちが絶景とともにティータイムを楽しんでいました。



④グリンデルワルト Grindelwald

村の中心まで迫っていた雄大なグリンデルワルト氷河のおかげで、この谷間の村には早くから観光業が始まりました。文献によると最初の氷河観光の記録は、皇太子アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク Albrecht von Brandenburg と英国大使のトマス・コックス Thomas Cox で1690年のことでした。後に詩人アルブレヒト・フォン・ハラーの影響で富裕層の間にこの地域への関心が広まり、1779年にゲーテが旅したように、作家や貴族など多くの人が訪れるようになりました。当時はホテルもなく、司祭館に宿泊していましたが、その後には、プロイセン王のフリードリヒ・ヴィルヘルム Friedrich Wilhelm とその息子（後のドイツ皇帝ヴィルヘルム1世）や、フランス皇帝ナポレオン1世の皇后マリーア・ルイーズ Maria Luisa の名前も残されています。1820年には最初のホテル「シュヴァルツェ・アドラー Schwarze Adler」（現・ホテル・サンスター）が誕生。同時に本格的なアルピニズム黄金期を迎え、1885年に観光協会が創設され、初めてウィンターシーズンの観光が始まりました。1888年には、村のシンボルとなった宮殿のように豪華なホテル「バー Bär」（現・閉業）がオープン。1890年にグリンデルワルトまで結ぶベルナーオーバーラント鉄道、1893年にグリンデルワルトからクライネ・シャイデックへと結ぶヴェンゲルンアルプ鉄道が開通。同年「ホテル・アルペンルーエ Hotel Alpenruehe」（現・グラン・ホテル・レジーナ）、1897年「ホテル・アルピナ Hotel Alpina」、1903年「ホテル・ユングフラウ Hotel Jungfrau」（現・ユングフラウワッジ）、1907年「ホテル・ベルヴェデーレ Belvedere」が開業するなど、観光客の数が増大するにつれ、ホテル数も増えてきました。



アルプスの三名山～アイガー、メンヒ、ユングフラウ～

ベルナーオーバーラント地方のアルプス「ベルナーアルプ Berner Alpen」にそびえるアイガー（3970m）、メンヒ（4107m）、ユングフラウ（4158m）は、マッターホルンやモンブランなどと並び評されるアルプスを代表する名峰で、一帯はアルプス唯一の世界自然遺産に認定されています。ユングフラウ地方のシンボルであり、インターラーケンのハーダー・クルム展望台や、シニギ・クラッテ・クルム展望台、それぞれ山頂へ結ぶケーブルカーや登山鉄道の途中、ミューレンバーンなどは、三名山が眺められる展望ポイントとして有名です。大きな山々なので、全体を眺めるには少し離れたところからの眺望と、三名山の麓に位置するクライネ・シャイデックでは、迫力ある雄姿を間近で見上げることができます。



三名山の名前の由来

アイガー、メンヒ、ユングフラウという山の名前は、同時に登場したわけではなく、最も古くから文献で確認されていたのが「アイガー Eiger」です。スイスの山名としては2番目に古い登場で、1252年の記録にその名があります。由来には諸説ありますが、「鋭い、尖った」という意味のラテン語の Acer、フランス語の Aigu から Eiger になったという説が有力。ほかにも、かつて Heiger と書かれていたものがあることから、地元方言で「高い」を意味する “hej” とヤリを意味する “Ger” を組み合わせた言葉に由来するという説もあるようです。

次に、「ユングフラウ Jungfrau」は、12世紀からインターラーケンにある修道院に由来しています。独語で聖母マリア（聖處女）や乙女（生娘）を意味する単語なので、マリア様または修道女たちから、その名がついたとされています。そのほか、雪を冠った山並が白い服を来た修道女を連想させるという説もあります。

最後に、「メンヒ Mönch」という名が登場するのは1860年代になってからのことです。その前は、Grossmönch、もっと前は Inner Eiger（アイガーの内側）、Klein Eiger（小さいアイガー）など、さまざまな名前で記されていました。修道女に由来するユングフラウ山の隣にあることと独語で修道士を表す Mönch と同じ綴りなので、修道院に由来するとよく思われがちですが、1606年の地図に Münche という地名があり、Münchenberg という名で呼ばれていたこともあることから、山麓の放牧地で家畜として飼われていた「せん馬=Münch」に由来するという説が主流です。

Gallery

三名山はその名前から、よく人物になぞらえた絵が描かれています。とくに、19世紀から20世紀にかけての山岳観光ブームで、各国から訪れる旅行客が記念としてお土産を買い求めるようになり、民芸品や木彫りなどとともに、こうした三名山をモチーフにしたポストカードや絵図がつくられました。



山岳観光の発展と鉄道

アルピニズムがブームとなり、スイスアルプスでの山岳観光がスタートした19世紀末。アルプス山麓の村々へ結ぶ鉄道やバス、山上へと結ぶ登山鉄道やロープウェイなどの山岳交通が発展していきます。現在、スイス全土をくまなく結ぶ世界屈指の交通ネットワークのほとんどが、約100年前につくられていったのです。

中世から巡礼地として多くの人が登山していたリギ山へフィツナウから、ヨーロッパ最古となる登山鉄道が誕生したのが1871年のこと。同年ゴッタルド鉄道会社が設立され、翌1872年には、線路とウーリ州のゲシュネンとアイロロを結ぶゴッタルドトンネルの工事を開始。中世の時代より、悪魔の橋の伝説で知られる難所シェレネン峡谷を抜けて多くの旅人や商人が行き交ったアルプス伝統のゴッタルド峠を越えることなく、アルプスを南北に結ぶゴッタルド鉄道(現・スイス国鉄ゴッタルド線)がついに1882年に開通したのです。



また東部アルプスでは、1888年、レーティッシュ鉄道の前身となる「ランドクアルト=ダヴォス狭軌鉄道株式会社」が創設。1898年には現・世界遺産に認定されている伝説の山岳鉄道アルブラ線の工事が始まり、1904年にサン・モリッツまで開通。1906年に工事に着工したベルニナ線は、1910年にサン・モリッツからイタリアのティラーノまで開通しました。また、中世から山の峠道を走ってきた郵便馬車が自動車のポストバスとして走り始めたのも1906年のこと。その数年後の1919年にはすでにアルプスの峠をめぐる観光ルートも登場しています。



ユングフラウ地方の山岳交通

アルピニズムと山岳観光の黎明期。各国の貴族や財界人、知識人たちがユングフラウ地方にやってきました。その玄関口であるインターラーケンから名峰ユングフラウを眺めていた人々は、もっと山上へ近づきたいと望むようになり、その願いに答えるように、次々と山岳鉄道が開通していきました。



1896年

ベルナーオーバーラント鉄道開通

Berner Oberland-Bahn (BOB)

ユングフラウ地方の山岳鉄道の歴史はここから始まります。シュヴァルツェ・リュッチネ(黒リュッチネ川)とヴァイセ・リュッチネ(白リュッチネ川)が流れる谷沿いを走る鉄道の構想はすでに1873年にありましたが、地元の村々によって一度は却下されました。しかし多くの観光客が集うようになり、計画は広く支持されるようになり、1887年認可を受け工事が始まります。そこから3年後の1890年6月にインターラーケンからグリンデルワルトとラウターブルンネンを結ぶ鉄道が開通しました。



1893年

シニゲプラッテ鉄道開通

Schynige Platte-Bahn (SPB)

アイガー、メンヒ、ユングフラウの三名山を正面に眺めるシニゲプラッテ。鉄道開通前から多くの登山者が訪れる人気スポットでした。鉄道敷設の構想は1880年にさかのぼりますが、設計案が完成し、認可を得るまで約10年かかりました。1891年から敷設工事に着手し、翌年1892年9月に工事終了。1893年6月、蒸気機関車での定期運行をスタートさせました。

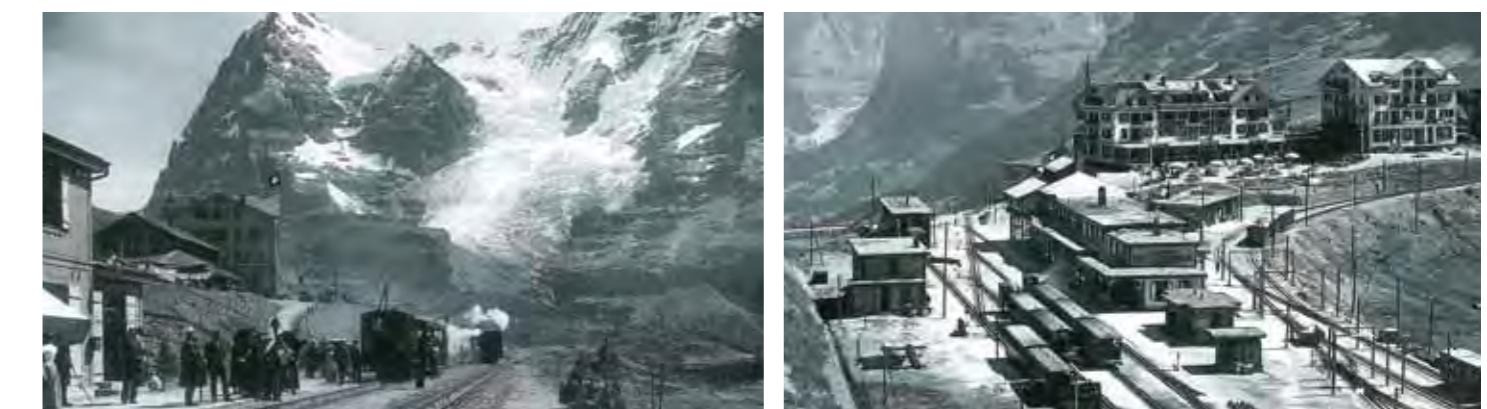


1893年

ヴェンゲルンアルプ鉄道開通

Wengernalpbahn (WAB)

1840年にはすでにホテルがあったクライネ・シャイデックまで結ぶ鉄道の計画は、ベルナーオーバーラント鉄道と同時期にありました。認められたのは1890年まで待つこととなります。同年、ヴェンゲルンアルプ鉄道会社(現・ユングフラウ鉄道グループ)が創設され、翌年1891年にラウターブルンネンからの路線とグリンデルワルトからの路線の両線の工事開始。1893年6月、ついに後のユングフラウ鉄道へつながるヴェンゲルンアルプ鉄道が開通しました。





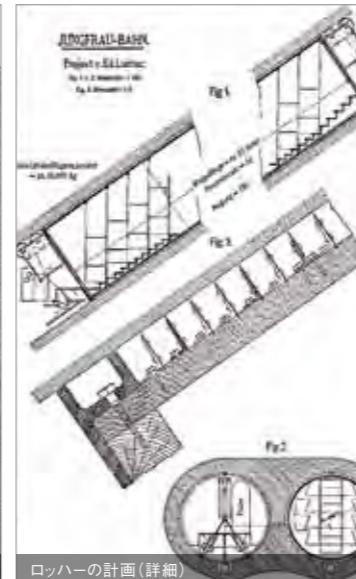
ユングフラウ鉄道誕生への軌跡

2012年8月1日に全線開通から100周年を迎えるユングフラウ鉄道。世界中から毎年70万人を超える乗客数を誇るスイスで最も有名な登山鉄道です。名峰アイガーとメンヒの中を通り、ヨーロッパ最高地点となる標高3454mの駅まで結ぶという驚きの鉄道は、多くの人々の夢をのせ、数々の困難を乗り越えて、100年前に誕生しました。

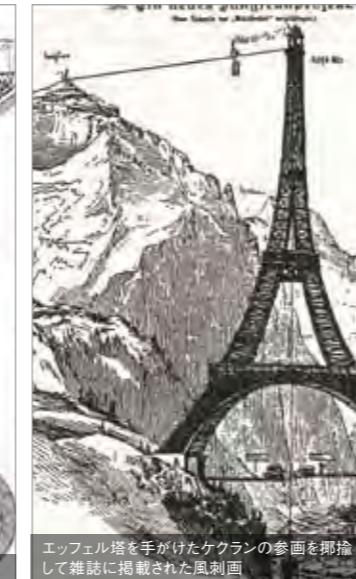
名峰ユングフラウへ結ぶ登山鉄道は、まったくの夢物語だといわれてきました。1889年から1890年にかけて、スイスを代表する有名技師たちの計画が登場。一人がエッフェル塔を設計した技師モーリス・ケクラン、もう一人がピラトゥス鉄道を設計したエドゥアルト・ロッパーでした。ケクランはロッパーの計画にのり、1891年に連邦議会の承認を得ますが、実現しませんでした。これまでのプランはすべてラウターブルンネン谷からユングフラウまで約3000mという標高差を結ぶもので、技術的にも予算的にも実現不可能といわれてきました。



バーゼルの路面電車を手がけたトラウトヴァイラーが設計した計画



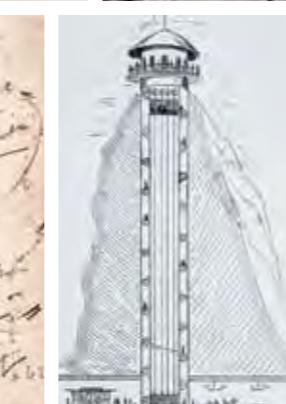
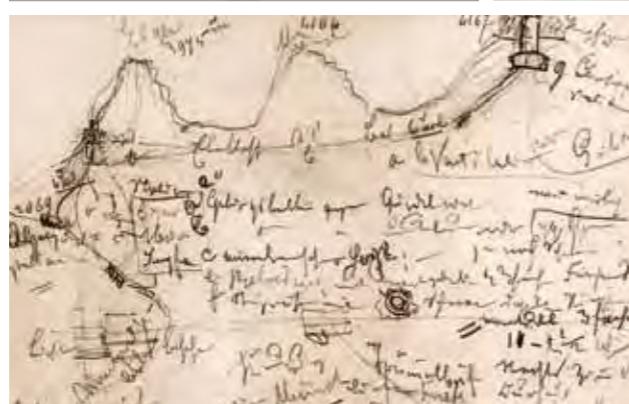
ロッパーの計画(詳細)



エッフェル塔を手がけたケクランの参画を揶揄して雑誌に掲載された風刺画

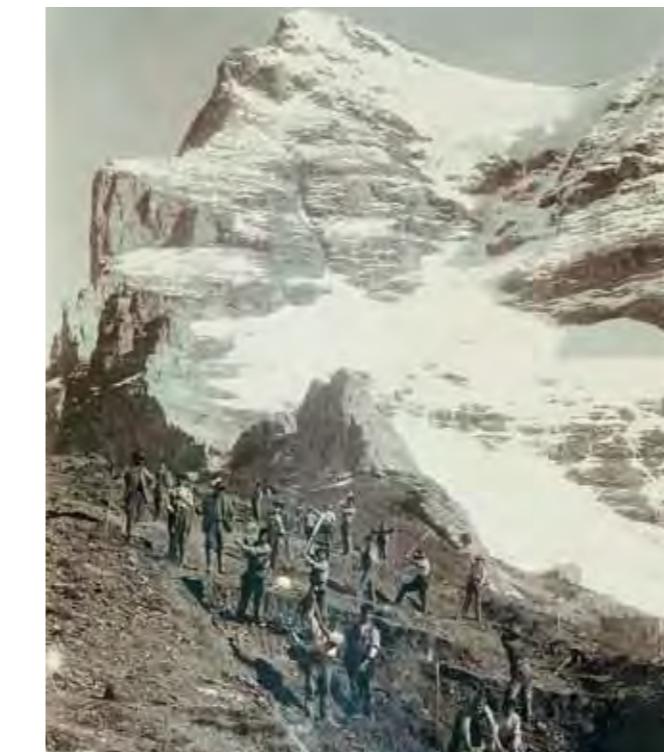
1893年 画期的な設計案が登場

“天空へ向かう夢の鉄道”といわれたユングフラウ鉄道の誕生はまさに奇跡的なことでした。すでに他の鉄道事業で名をあげていたアドルフ・グイヤー・ツェラーが、三名山の麓で娘とハイキングを楽しんでいた突然ひらめいて、書き留めたスケッチ。従来のように、ラウターブルンネン谷からではなく、すでに開通していたヴェンゲルンアルプ鉄道の終点であるクライネ・シャイデックからアイガーとメンヒ山中にトンネルを通してユングフラウまで結ぶという斬新な案でした。地元の人々はこの画期的な設計プランに夢をふくらませ賛同。1894年には、連邦議会から建設許可がありました。



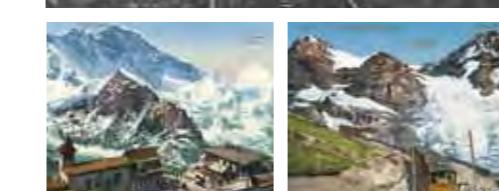
1896年 敷設工事の始まり

自己資金を投資したうえ、区間にごとに運行して営業することで次の工事資金をやりくりすることなどとあわせて承認され、1896年7月27日、ついに夢物語といわれた登山鉄道の敷設工事に着工しました。約100人のイタリア人工夫が雇われ、シャベルやピッケルを使い手作業で工事はすすめられました。



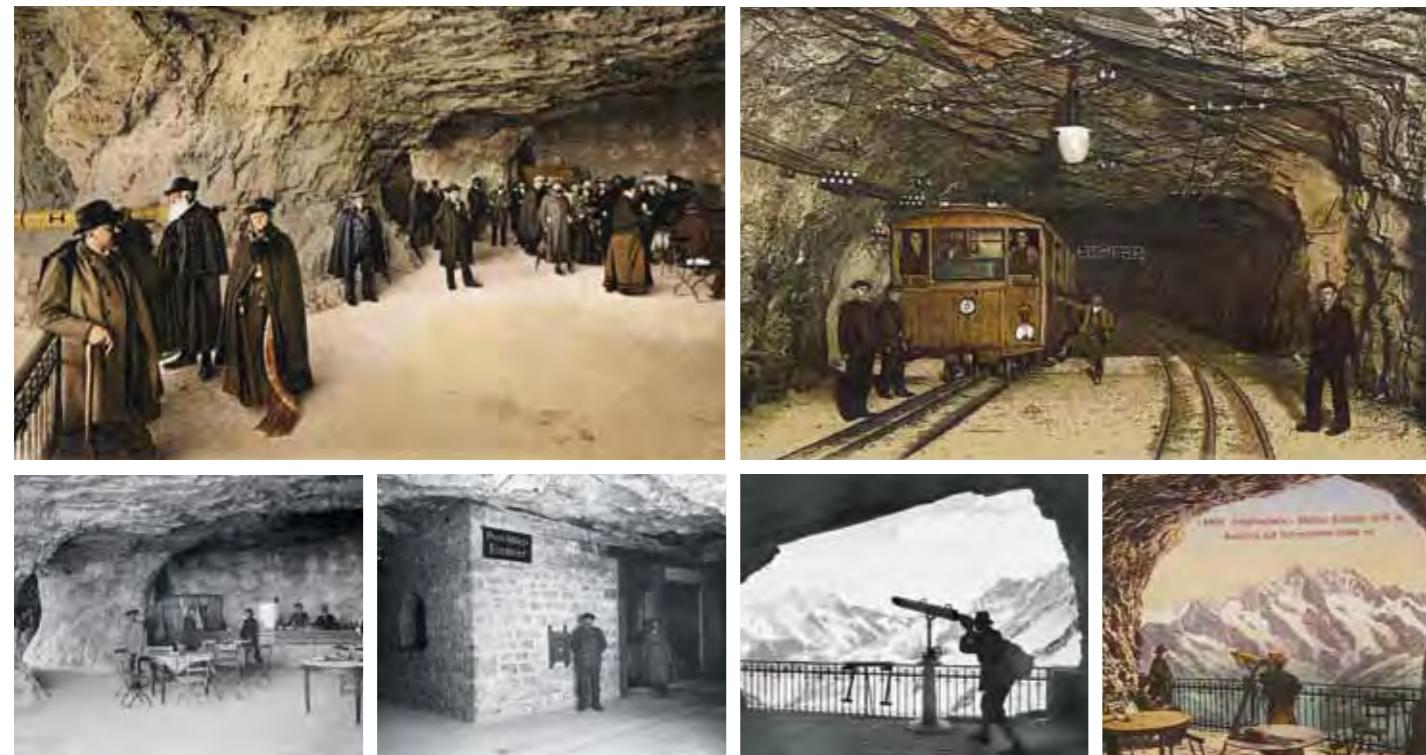
1898年 アイガーグレッチャー駅開業

着工から2年後となる1898年には、クライネ・シャイデック駅からアイガーグレッチャー駅までの最初の区間が開業。駅や売店がつくられ、アイガー氷河や雄大な山々の眺望を目当てに世界中の観光客が訪れました。アイガーグレッチャー駅から先の区間となるトンネル工事がスタート。1899年にグイヤー・ツェラーが肺炎のため死去しますが、彼の遺志は引き継がれ、敷設工事は続行。同年、ロートシュトック駅(現在は廃駅)、1903年にはアイガーヴァント駅が開業しました。



1905年 アイスメーラ駅開業

自己資金を投資したうえ、区間ごとに運行して営業することで次の工事資金をやりくりすること、ユングフラウヨッホに気象観測所を建設することなどをあわせて承認され、1896年7月27日、ついに夢物語といわれた登山鉄道の敷設工事に着工しました。約100人のイタリア人工夫が雇われ、シャベルやピッケルを使い手作業で工事はすすめられました。



1912年 ユングフラウヨッホ駅開業

1912年2月21日、ついにユングフラウヨッホまでのトンネルが貫通。創始者ツェラーの夢がかなった瞬間でした。スイス建国記念日の8月1日、ヨーロッパ最高地点の鉄道駅がオープンし、ユングフラウ鉄道全線が開通。多くの観光客が氷原に出て、アレッチ氷河観光を楽しみました。レストランなどの施設のほか、1930年代には高地山岳研究所とアイスパレス(氷の宮殿)がつくられました。



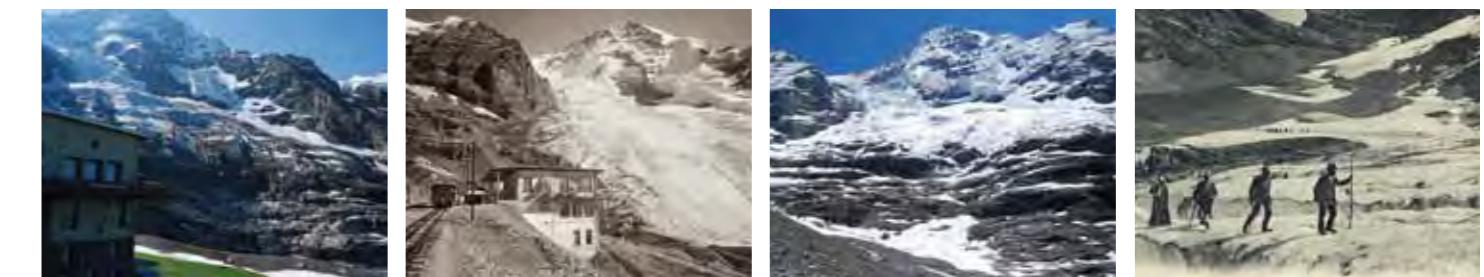
ユングフラウ鉄道と登山

ユングフラウ鉄道が開通したことにより、以前より氷河観光や登山が簡単に楽しめるようになりました。アルプス観光は、資金もそれなりにかかる上流階級の娯楽でもあったため、当時の写真などをみると、男性は立派な紳士服、女性はドレスを身にまとめて山や氷河を歩いています。アイガーグレッチャー駅やユングフラウヨッホ駅から気軽に氷河を体験してみるという観光客のほか、ユングフラウ地方の山々に登るベースとなる山小屋へ向かうためにアイスメーラ駅やユングフラウヨッホ駅を利用する登山客もいました。観光客や登山客の服装は大きく変わりましたが、駅から広がる眺望は約100年の時を経た今も変わることがありません。



アイガーグレッチャー駅

駅名であるアイガー氷河(アイガーグレッチャー)の前につくられた駅。開業時には駅まで迫っていた氷河ですが、約100年の間にかなり後退しました。今でも駅から少し歩いていたり、駅併設のレストランの展望テラスから目の前に氷河をみることができますが、かつてのように氷河の上を歩いたり、氷河の上をソリで滑ったりすることはできなくなりました。



アイスメーラ駅

独語で氷の海(アイスメーラ)という名の通り、まるで海のように迫力ある氷塊が連なる絶景が広がっています。展望窓から見えるこの雄大な氷河の眺望は、今も昔も変わることはありません。かつては、この駅で降りて、氷河の上を歩き、ベルグリヒュッテ(ベルグリ小屋)へ向かいました。日本人としてユングフラウへ初登頂した加賀正太郎氏もそのルートをたどっています。



ベルグリヒュッテ(ベルグリ小屋) Berglihütte

アイスメーラの西側、メンヒの北東。標高3299mのベルグリ岩上にある山小屋。最初の小屋は1869年に造られ、1883年と1903年に建て替えられた歴史的な山小屋で、スイス山岳会(SAC)の特別保護指定小屋になっています。ユングフラウ鉄道が全線開通し、1924年に登山者用の宿泊施設がユングフラウヨッホに造られ、さらに1979年にメンヒスヨッホヒュッテができるからは、その登山拠点としての役割はほとんどなくなりましたが、歴史的な山小屋として今も残されています。



ユングフラウヨッホ駅

ユングフラウヨッホ駅からは開業当初より氷原への出口が設けられ、多くの観光客がアレッチ氷河観光を楽しみました。現在、一帯は世界遺産に認定されていますが、アレッチ氷河を中心に山々が連なる眺望は100年前と同じ。登山者たちはメンヒスヨッホヒュッテ（メンヒスヨッホ小屋）からユングフラウ地方の山々、あるいはアレッチ氷河を横断してヴァーレーアルプス（ヴァリスアルペン）の山頂へ向かいます。かつてはアレッチ氷河を横断する上流階級の方々の荷物を犬ぞりが運搬していました。



メンヒスヨッホヒュッテ（メンヒスヨッホ小屋）Mönchsjochhütte

メンヒの南東。かつてユングフラウ地方の登山ベースであったペルグリヒュッテの上、標高3657mのメンヒスヨッホにある山小屋。アイガー Eiger、メンヒ Mönch、ユングフラウ Jungfrau、フィーザーホルン Fiescherhorn、トゥルクベルク Trugberg、ヴァルヒヤーホルン Walcherhornへの登山ベースになっています。ユングフラウヨッホ駅から歩いて1時間でアクセスできます。



コンコルディアヒュッテ（コンコルディア小屋）Konkordiahütte

複数の山から流れるアレッチ氷河の合流点であるコンコルディア・プラットにある伝統の山小屋。1877年にスイス山岳会として最初に建設した山小屋で、最初は20人が泊まれる小さな小屋でしたが、わずか5週間で造られました。当時、アレッチ氷河から約50mの高さになる岩上にありました。それから約130年が過ぎ、かなりの量の氷河が溶け、現在では氷原から約150mの高さにある小屋となってしまったため、約440段の階段がつけられています。



アイガー北壁への挑戦

標高3970m。ユングフラウ、メンヒとともに三名山と称されるアルプスを代表する名峰アイガーEiger。とくに切り立った北壁は、その登山の難しさからグランド・ジョラス、マッターホルンとともにアルプスの三大北壁といわれています。



アイガーへの初登頂はアイルランド人のチャールズ・バリントン Charles Barrington が地元グリンデルワルトの山岳ガイド、クリスチャン・アルマー Christian Almer とペーター・ボーレン Peter Bohren を連れて、西稜から1858年8月11日に成し遂げた。その後、数々の登山家がアイガーの頂に立ったものの、最も難しいといわれる北壁は長い間、難攻不落の壁でした。



1934年、ドイツのヴィリー・ベック Willy Beck とゲオルク・レーヴィンガー Georg Löwinger が世界で初めて北壁に挑んだが滑落して死亡。翌年、マックス・ゼドウルマイヤー Max Sedlmayr とカール・メーリンガー Karl Mehringer が挑戦するが標高3,300m付近で凍死。以来、この場所は「死のビバーク」と呼ばれています。この北壁制覇が力を誇示するプロパガンダになると考へたヒットラーの影響下で、1936年にドイツのアンドレアス・ヒンターシュトイサー Andreas Hinterstoisser とトニー・クルツ Toni Kurz、オーストリアのエディー・ライナー Edi Rainer とヴィリー・アンゲラー Willy Angerer の2隊が挑んだが、次々と滑落。最後に残ったクルツも救助隊のわずか先で、ザイルの結び目がカラビナに引っかかるという不運に見舞われ、ぶら下がったまま力つきました。後に「アイガー北壁の悲劇」と語り継がれ、映画化もされた有名な事件です。結局、1938年7月24日、ドイツのアンデレル・ヘックマイヤー Anderl Heckmair とルートヴィヒ・フェルク Ludwig Vörg、オーストリアのハインリッヒ・ハラー Heinrich Harrer とフリッツ・カスペラク Fritz Kasperek がアイガー北壁の世界初登頂を果たしました。ハインリッヒ・ハラーは後にアイガー北壁の頂上下の氷壁を指す『白い蜘蛛 Die Weiße Spinne -Das große Buch vom Eiger』という本を執筆しています。



通称「ヘックマイヤー・ルート Heckmair-Route」ともいわれる、数ある登攀ルートの中でも最も有名なルートで、2008年スイス人登山家ウエリ・シュテック Ueli Steck が2時間48分という記録を出したが、2011年スイス人登山家ダニエル・アーノルド Daniel Arnold が2時間28分で登頂を果たし、最短記録を更新しました。

アイガー北壁と日本人

1963年、芳野満彦、渡部恒明らが日本人として初めてアイガー北壁に挑みましたが成功せず。その時、滑落しながらも助かった渡部が再び挑んだ1965年8月16日、高田光政が日本人初登頂を果たしますが、パートナーだった渡部は登頂まであと少しのところで命を落としてしまいます。この有名な悲劇を元に、後に作家・新田次郎は『アイガー北壁』という小説を書いています。

続いて1969年7月、モンベル社創業者で現会長の辰野勇が若干21歳にして、日本人2番目となるアイガー北壁登頂を果たします。同年の8月15日、加藤滝男、今井通子、加藤保男、根岸知、天野博文、久保進、原勇からなる登山隊が、1ヶ月かけて直登ルートを開拓することに成功。アイガー北壁に開かれた30本以上のルートの中でもっとも直線に近いルート「ヤバーナー・ディレッティシマ※(日本直登ルート)Japaner Diretissima」として、今もアイガー北壁登攀の歴史に刻まれています。



※ディレッティシマ(Diretissima)は、イタリア語で一直線、まっすぐを意味する単語で、登山の用語としては岩壁や氷壁を山頂に向かって直線的に登るダイレクトルートを指す。

そのほか、1970年1月27日、森田勝・岡部勝・羽鳥祐治・小宮山哲夫の隊がアイガー北壁冬季日本人初登頂を果たし、1977年3月9日、長谷川恒男が冬季単独初登頂を成功させています。

加賀正太郎

1910年 | 明治43年 | 8月
ユングフラウ日本人初登頂

大阪に生まれ、昭和から明治にかけて証券業、林業などの経営で成功した実業家で、ニッカウキスキー（現・アサヒビール）設立時の出資者のひとりでもあった加賀正太郎（1888-1954）。外国が遠い異国であった時代に、東京高等商業学校在学中の若干22歳の若さで、ロンドンで開催されていた日英博覧会の見学のために出かけました。欧洲旅行の道中で聞いたユングフラウへの登山を思い立ちます。そして、地元ガイドとともに、1910年8月24日、日本人として初めて名峰ユングフラウ登頂を果たしました。欧洲アルプスの4000m峰への登頂としても日本人初となる偉業として日本登山史上に刻まれました。



加賀正太郎とガイドのヘスラー※
(明治43(1910)年8月、日本人としての初登頂となったユングフラウにて)

※加賀高之氏蔵



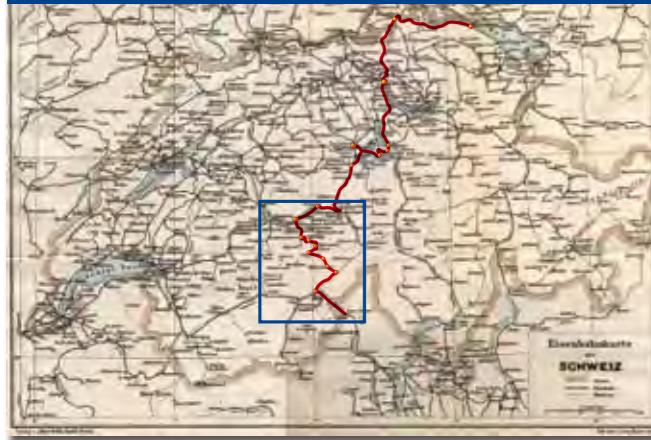
彼はまたヨーロッパの登山用具や衣服を持ち帰り、その後の日本登山界に大きな刺激を与えるました。辻村伊助でもその影響を受けた一人でした。4年後の大正3年1月、日本人初となる厳冬期のユングフラウやメンヒ登頂を成し遂げた彼は、加賀氏からの影響について自身の著作『スイス日記』の中で綴っています。折しも、1905年になり日本山岳会が組織され、ようやくアルピニズムの概念が日本に紹介されはじめた黎明期。1908年に友人で後に山岳画家としても知られる中村清太郎とともに、日本山岳会の初期のメンバーとして入会しています。そして、先駆者として輝かしい足跡を残しました。

アルプスの旅 ユングフラウ初登頂への道

ドイツからオーストリアを経てスイスに入国した加賀正太郎氏。すでに現在とほぼ同じ交通ネットワークが完成しており、鉄道と船を使ってめぐった彼のスイス旅行の行程は、現在の旅行者がたどる人気の観光ルートとも重なるものでした。100年の時を超えて、今多くの人々を魅了する名所の数々に立ち寄りながら、ユングフラウ地方の山岳鉄道を乗り継ぎ、標高4158mのユングフラウ山頂へ向かいます。

ユングフラウ鉄道の敷設工事もアイスマーラ駅からユングフラウヨッホ駅までの最終区間を残すのみとなっていました。彼は、最初の駅となるクライネ・シャイデック駅からユングフラウ鉄道に乗って、1905年に開業した当時の終点アイスマーラ駅で下車。そこからユングフラウ山頂を目指しました。

スイス旅行の行程



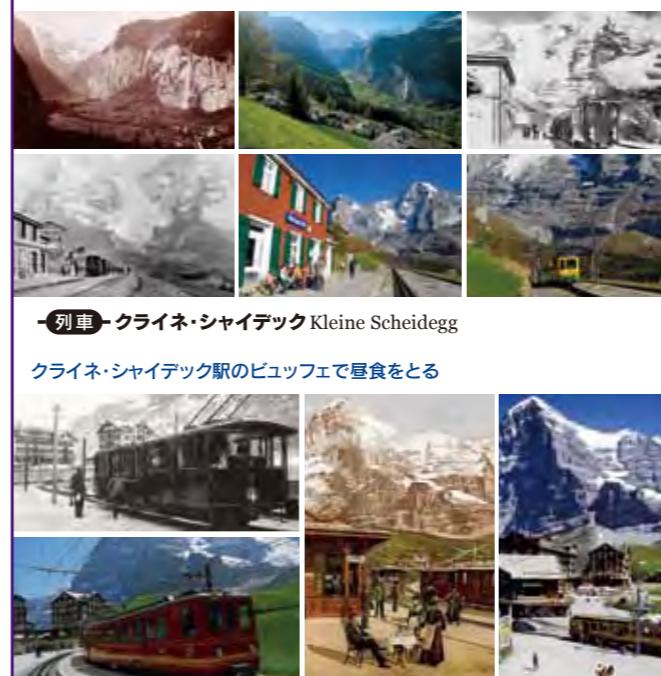
8月19日 コンスタンツKonstanz → ノイハウゼン
(ライン湖観光)Neuhäusen → チューリヒZürich
8月20日 チューリヒ → アルト・ゴルダウArth Goldau
→ リギ・クルム(リギ山観光) → フィットツナウVitznau → ルツェルンLuzern
8月21日 ルツェルン → アルブナッハシュタートAlpnachstad → ブリエンツBrienz → インターラーケンInterlaken
8月22日 インターラーケンでガイド手配や用具の調達など登山準備

※日本山岳会発行の機関誌『山岳』によせた紀行文より抜粋

スイスアルプスの旅

8月23日 インターラーケン - 列車 - ラウターブルンネンLauterbrunnen

ラウターブルンネンからヴェンゲルンアルプ鉄道でクライネ・シャイデックへ



列車 - クライネ・シャイデック Kleine Scheidegg

クライネ・シャイデック駅のビュッフェで昼食をとる



列車 - アイスマーイ Eismeer → ベルグリヒュッテ Berglihütte - 泊

クライネ・シャイデックからユングフラウ鉄道に乗って当時の終点アイスマーラ駅へ



アイスマーラ駅から氷河において、ベルグリヒュッテ(山小屋)へ



8月24日 ベルグリヒュッテ - 登山 - ユングフラウ山頂Jungfrau → コンコルディアヒュッテKonkordiahütte - 泊

標高4158mのユングフラウへ登攀

ユングフラウヨッホ駅(3454m)から続く氷原ユングフラウフィルンからアレッチ氷河横断へ



氷河が合流するコンコルディアプラツツにある伝統の山小屋「コンコルディアヒュッテ(コンコルディア小屋)」で1泊

8月25日 コンコルディア小屋 → (アレッチ氷河横断) → エッギスホルンEggishorn → フィーシュFiesch - 馬車 - ブリークBrig → イタリアへ

ラウターブルンネンからヴェンゲルンアルプ鉄道でクライネ・シャイデックへ



アレッチ氷河がカーブするポイント。昔も今も、絶景で有名なエッギスホルンの展望台

横有恒

1921年 | 大正10年 | 9月
アイガー東山稜・世界初登攀

日本山岳会会長を歴任し、マナスル第3次登頂隊長としてマナスル初登頂にも成功した有名な登山家、横有恒（1894-1989）。名は「ゆうこう」「ありつね」の両方で表記されることがあります、ローマ字でのサインでは「Yuko（ユウコウ）」と記されています。1914年に日本山岳会に入った彼は、慶應義塾大学卒業後、アメリカ留学を経て1919年から1921年にかけてヨーロッパ滞在中に、スイスアルプスをまわり、1921年9月10日、世界中の登山家が挑んだ名峰アイガーの東山稜（ミッテルレギ稜）の初登攀に成功しました。彼の初登攀を支えたのはグリンデル



横有恒（マナスル第2キャンプにて）

ワルトの山岳ガイド＜サムエル・ブラヴァンド＞＜フリツ・シュトイリ＞＜フリツ・アマター＞の3名。彼らとの親交は続き、後に秩父宮殿下や多くの登山家を村に連れてきたり、ミッテルレギ小屋建設に尽力するなど、村人たちと固い絆を結んでいた横有恒の名は今でもグリンデルワルトに深く刻まれています。



ミッテルレギ稜経由でアイガー初登頂後、ヴェンゲルンアルプ鉄道の前で。
左よりサムエル・ブラヴァンド、横有恒、フリツ・シュトイリ、フリツ・アマター



ミッテルレギ稜初登攀への道

横有恒は、1919年秋からグリンデルワルトのホテル「アドラー」の2階の角部屋に長期滞在し、後に彼の登山を支える山岳ガイドとなり、晩年まで親交を温めることとなるサムエル・ブラヴァンドを教師としてドイツ語を学んでいた。当時、小学校の先生をしながら山岳ガイドをしていた彼に白羽の矢をたてた宿の主人からの熱心な依頼で引き受けたといい。そして彼らはブラヴァンドの良き相棒であるエミール・シントイリとともに、1920年7月、ユングフラウヨホからユングフラウ山頂を目指した。8月にはオックスフォード大学に留学中の兄の智雄さんが来訪し、一緒にフィンスターーファルホルンに登り、西のアンダーセン稜沿いにグロッセ・シュレックホルンをグレックシュタインへと下った。1921年夏にはソルマットへ行き、マッターホルン、モンテ・ローザに登攀した後、アレッチホルンからアレッチ氷河を横断し、ユングフラウヨホへ向かい、グリンデルワルトへ戻った。

そして、グリンデルワルトに帰った彼らは、当時まだ未踏のルートだったくミッテルレギ稜からのアイガー登頂への挑戦を決めた。この尾根沿いで下山は成功していたが、登攀の方は数多くの登山家が挑んだもののすべて失敗していたのだ。ミッテルレギ稜からの登攀に挑戦した経験をもつエミール・シントイリが病気で入院していたため、同行を断念し、別の適任者を探した。そしてエミールの兄フリツと、ミッテルレギ稜からの下山に2度成功しているフリツ・アマターをメンバーに加えたという。そして9月10日夜7時、横有恒と3人の山岳ガイドは、ついにミッテルレギ稜からのアイガー登頂を世界で初めて成し遂げた。

〔参考文献〕
サムエル・ブラヴァンド著／マルグリット・ブラヴァンド、ヴァルター・デュリヒ編「Erinnerungen an Yuko Maki（横有恒を偲んで）」



アイガー東山稜（ミッテルレギ稜）

ミッテルレギヒュッテ（ミッテルレギ小屋）

Mittellegihütte



横有恒の世界初となるミッテルレギ稜からのアイガー初登頂を記念して、この東山稜（ミッテルレギ稜）に 1924年に山小屋「ミッテルレギヒュッテ」が建てられることになりました。約16000スイス Francという建築費用の半分以上となる約10000スイス Francは横氏の寄付によるものでした。建築資材の運搬は大変困難なものだったと伝えられています。すべての資材はヴェンゲルンアルプ鉄道とユングフラウ鉄道を使い、グリンデルワルト駅からアイスマーレ駅まで運ばれ、そこから大きな運搬用のソリを使い、シャリバントChallibandと呼ばれる岩棚まで運ばれ、標高3555mの建築現場までウインチで引き上げされました。

夏の登山シーズンにはアイガー山頂をめざす多くのアルピニストで賑わいをみせていた有名な山小屋ですが、次第に手狭になり、2001年夏、新しい小屋に建て替えられることになりました。しかし、アルピニズムの歴史を語る貴重なものである旧山小屋を保存しようということで、2001年5月末に、ヘリコプターでアイガーグレッチャー駅上の丘に移築されました。そして2011年、翌年にユングフラウ鉄道が全線開通100周年をむかえることを記念して「アイガー・ウォーク」というテーマトレイルが整備され、駅上の高台から人気ハイキングコースの展望スポットに再び移築されました。現在、グリンデルワルト郷土博物館の協力により、旧山小屋が使われていた頃と同時代の家具などが内部に再現されています。



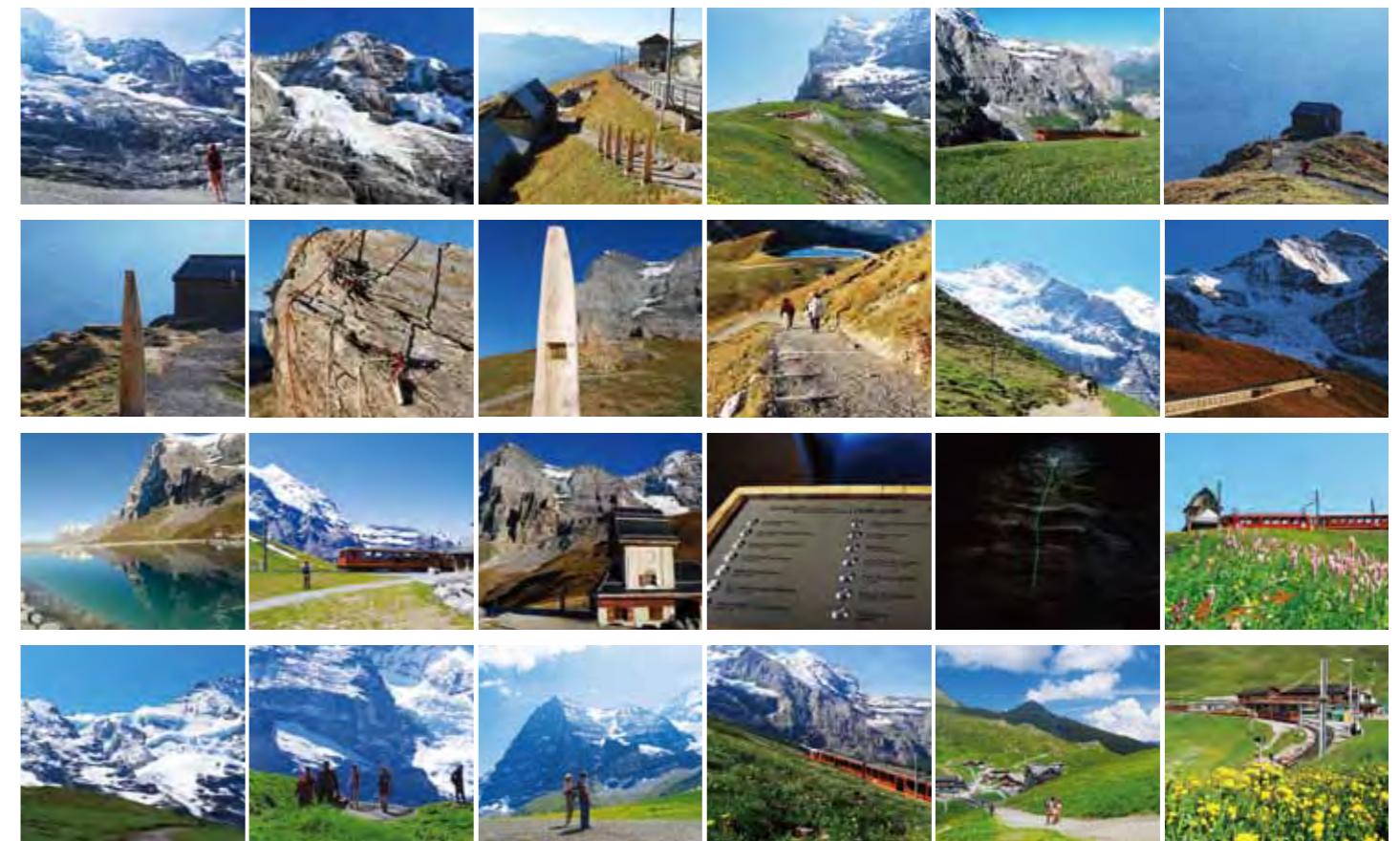
アイガー・ウォーク Eiger Walk

クライネ・シャイデック＝ファルボーデン＝アイガーグレッチャー

Kleine Scheidegg (2061m) = Fallboden = Eigergletscher (2320m)

所用時間：約1時間～2時間 レベル：初級・中級

ユングフラウ鉄道が2012年に全線開通100周年を迎えることを記念して、クライネ・シャイデック駅からアイガーグレッチャー駅までユングフラウ鉄道路線に沿って歩く、人気のハイキングコースを新たに整備しました。アイガーに挑んだ登山家たちの歴史をたどるポイントを加え、2011年夏から「アイガー・ウォーク Eiger Walk」として提案しています。横有恒からの寄付金を受けて実現した旧・ミッテルレギ小屋が移築されたほか、教会のような旧・変電所の建物を改修して、アイガー北壁登攀の歴史を紹介する展示館「ヒルフリChilchli（小さなチャペルという意味の方言）」もつくれました。アイガーはもちろん、メンヒ、ユングフラウの三名山が広がる迫力の眺望、山々を水面に映す美しい貯水湖ファルボーデンゼー、雄大なアイガー氷河など、アルプスの絶景を存分に満喫できる名コース。一帯は高山植物の宝庫で、早咲きの花々は6月末から7月中旬の雪どけと同時に咲き誇ります。



秩父宮雍仁親王

1926年|大正15年|8~9月
殿下のアルプス登山

大正天皇第二皇子で今上天皇の叔父にあたるちちぶのみや やすひとしんのう秩父宮雍仁親王殿下(1902年-1953年)は、現在でも秩父宮杯、秩父宮ラグビー場、秩父宮記念スポーツ博物館にその宮号を遺しているように、さまざまなスポーツ振興に尽力され「スポーツの宮様」として広く国民に親しまれた。自身もテニスやスキーなどを好んでいたというが、何といっても長きにわたり愛好されていたのが登山だった。スコットランドの山やスイスアルプス、日本アルプスなどに登られ、日本山岳会名誉会員で、英国山岳会名誉会員にも選出されている。1921年、赤倉の細川邸に逗留して妙高山麓でスキーを楽しめた19歳の青年の頃から晩年まで、生涯を通して山岳に深い興味をもち楽しんでいたといわれる。



左から松本重治、秩父宮、松方三郎。アルプスにて横有恒が撮影

スイスアルプスへの挑戦を決めたのは、殿下が24歳の折、英國オックスフォード大学に留学していた1926年のことだった。ちょうどスイスにいた登山家・横有恒が、殿下のアルプス登山の案内役を引き受けってくれないかとの要請を受ける。その時、イギリスにいたウェ斯顿師と相談して依頼を引き受けたことにした横は、ロンドンに滞在していた松方三郎とともに準備にとりかかった。アルビニズムがすでにブームとなっていた英國の都ロンドンの有名店で一流の登山用具をそろえ、山岳ガイドの選定や宿の手配などの準備のため、同年7月、再びスイスのグリンデルワルトを訪れた。山岳ガイドには、アイガー・ミッテルレギ稜(東山稜)初登攀を果たした時の案内人で信頼を寄せているサムエル・ブラヴァンド Samuel Brawand とフリツ・アマター Fritz Amatter、フリツ・シュトイリ Fritz Steuri、その弟エミル・シュトイリ Emil Steuri という地元ガイドに、カナダで横と知り合いアルバータ山の初登頂を成し遂げたハインリヒ・フーラー Heinrich Fuhrer をグシュタードから呼んできてメンバーに加えた。(ヴァレー地方の登山では、兵役ではずれるブラヴァンドの代わりにザンクト・ニクラウスのヨゼフ・クヌーベル Josef Knubel が参加することとなる)。

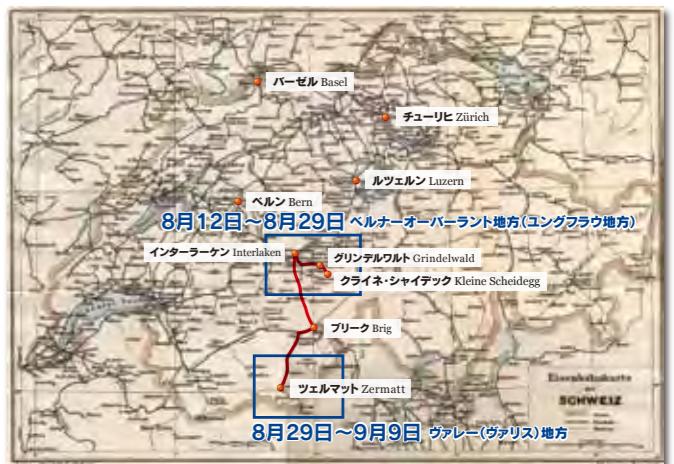


左から秩父宮、フリツ・アマター、エミル・シュトイリ、ハインリヒ・フーラー、サムエル・ブラヴァンド。ヴェッターホルンにて横有恒が撮影(1926年8月または9月)

殿下のアルプス登山は、グリンデルワルトを拠点にベルナーオーバーラント地方の山々、続いてツェルマットを拠点にヴァレー(ヴァリス)地方の山々をめぐる計画に決定。ウェ斯顿師と相談のうえ、グリンデルワルトでは、一番豪華だった「グランドホテル・ベア」ではなく、静かな雰囲気の「ホテル・アルペルヌーエ(現・グランドホテル・レジーナ)」に決め、ツェルマットの宿は、1852年創業の名門ホテル「モン・セルヴァン(現・モン・セルヴァン・パレス)」に決めるなど、宿泊はもとより、食事や休憩所、山小屋、交通の手配など細やかな気配りのもと、詳細に準備を進め、一行を待った。



7月下旬には留学中の松方三郎と宮内庁御用掛として同行していた学習院教授の渡辺八郎の両名が到着。ウェ斯顿師も来訪してヴェンゲンに滞在していた。パリからは松本重治、細川氏一行、ロンドンから浦松佐美太郎、また日本から朝日新聞社の特派員として藤木九三がやってきた。そして8月12日に前田事務官、中村御用掛と共に殿下一行がグリンデルワルト到着。ファウルホルンとチュッゲンからメンリッヒエンまでのトレーニング登山、ビーホルンでの岩登り練習などを経て、ヴェッターホルン登攀。続けてユングフラウヨッホからアレッチ氷河横断の後、ベルナーアルプス最高峰のフィンスター・アールホルン、グロッセ・シュレックホルン、グリンデルワルトに一旦戻り、ローゼンラウイからエンゲルヘルナー登山。ベルナーオーバーラント地方の山々を存分に満喫した後、8月29日ツェルマットへ移動し、マッターホルン、プロイルヨッホ、ツイナルロートホルン、モンテローザの最高峰デュフェュール・シュピッツェなど、9月9日までヴァレー(ヴァリス)アルプスの山々を登山して、ロンドンへ帰国された。約一ヶ月の間、好天気に恵まれ、これだけの高峰を殿下が次々と登攀されたことは、ヨーロッパ登山界でも驚異の偉業として話題を集め、高く評価された。そして自國の皇族でも業績がなければ、会員に推さないという英國山岳会が後に殿下を名誉会員に推挙することになった。



松方三郎、横有恒、渡辺八郎の3名。オーベルアルヨッホ・ヒュッテの前で撮影(1926年9月18日)

スイスアルプス登山の旅(ユングフラウ地方)

秩父宮アルプス登山の旅の詳細は、横有恒の著作『わたしの山旅』ならびに、その出典とされる渡辺八郎の記録(『山岳』第二六年第一号記載)に記されている。
※著書の中で記述されている山の標高は当時の地図とも現在の公式地図とも異なる場合が多くみられるので、ここでの表記は現在発行されている国土地理院の公式地図の標高に準ずる。

| | |
|---|--|
| 8月12日 ▶グリンデルワルトGrindelwald - 泊 | |
| 8月13日 ▶ファウルホルンFaulhorn▶グリンデルワルト - 泊 | |
| ファウルホルン登山。山頂の小屋(ホテル)から目指すヴェッターホルンを含むベルナーアルプスの山々を眺める。シメリホルンSimelihorn(2751m)、レーティホルンRötihorn/Reeti(2757m)を通り、グリンデルワルトへ戻る | |
| | |
| 8月14日 ▶チュッゲンTschuggen▶メンリッヒエンMännlichen▶グリンデルワルト - 泊 | |
| 前日同様にトレーニングとしてヴェンゲルンアルプからチュッゲン登山。 | |
| | |
| 8月15日 グリンデルワルト▶イッシュボーテンIschboden▶グリンデルワルト - 泊 | |
| 松方、松本の両名は所用でロンドンへ。殿下と渡辺、横の3名でブラヴァンドとシュトイリ(エミル)の案内で、ビーホルンByhorn(2167m)で岩登りのトレーニング | |
| 8月16日 グリンデルワルト▶グレックシュタインヒュッテGlecksteinhütte - 泊 | |
| アマター、フーラー、シュトイリ(フリツ・エミル)、ブラヴァンドの案内で、ヴェッターホルン登山の拠点「グレックシュタインヒュッテ(グレックシュタイン小屋)」へ。殿下にとって初体験となる山小屋での宿泊 | |
| | |
| 8月17日 ヴェッターホルンWetterhorn▶グレックシュタインヒュッテ▶グリンデルワルト - 泊 | |
| 午前3時に出発し、7時40分にヴェッターホルン山頂(標高3692m)へ。10時には無事に山小屋に戻り、昨夜同宿したアメリカ人の登山隊と小屋前で氷河や山々を眺めながら談笑。 | |
| | |



※グリンデルワルトでの休養日にあてられた8月18日、8月22日、8月26～28日の行程は省略

アルプスの秩父宮サロン ユングフラウ地方に集まった日本人

秩父宮殿下のアルプス登山旅は、1926年の夏、ヨーロッパ登山界で最も話題を集めた一行だった。当時、英國でも登山は資金もかかる上流階級の娯楽だったため、英國人山岳会(アルパインクラブ)のメンバーには王族・貴族、実業家などが名を連ねており、山岳会は名士が集まるサロンのような様相を呈していたのだが、この秩父宮の旅に集まっていた人々もアルプスのサロンというべき華麗なメンバーだった。松方三郎、松本重治、細川護立など上流階級の子弟をはじめ、後の著書や活動を通して日本登山の発展のみならず、芸術や文化などさまざまな功績を残した、一流の顔ぶれが勢揃いしていたのだ。当時、登山のため、アルプスの山村にこれだけの日本人が集結することはもちろん初めてだったといふ。



松方 重治 (まつたけ さぶろう) 1899年～1973年

松方家第3代当主。第4代、第6代内閣総理大臣を務めた松方正義を父に、川崎造船所(現川崎重工)、川崎汽船、国際汽船などの社長で、ヨーロッパ滞在中に蒐集した珠玉の松方コレクションで有名な松方幸次郎を兄にもつ。実業家として活躍する一方で、日本登山界に多大な貢献をした登山家としても知られる。1913年(大正2年)、14歳で富士山に登山したのをはじめ、北アルプスを中心に多くの山々に登攀。1924年(大正13年)～1928年(昭和3年)にはヨーロッパに留学。そこで鹿子木員信、植有恒、浦松佐美太郎らとともに、スイス山岳会会員となった1925年(大正14年)から1927年(昭和2年)にかけてスイスアルプスの山々をめぐる。1926年(大正15年)に秩父宮殿下のアルプス旅に参加。英國山岳会会員となり1927年には浦松とともにアイガーのヘルツル後の大横断(完登)に成功。帰國後ジャーナリストとして活躍しつつ、富士山のほか精力的に登山を続けた。日本山岳会会長を歴任し、1970年(昭和45年)には、松浦禪夫、植村直己が日本人初のエヴェレスト登頂に成功した際の、登山隊隊長を務めた。著書に『アルプスと人』『アルプス記』など。

松本 重治 (まつもと しげはる) 1899年～1989年

大阪生まれ。母方の祖父が松方正義なので同じ年で親しい友人となる松方三郎は叔父にあたる。おなじく叔父にあたる松方幸次郎の娘と後に結婚。東京帝国大学大学院の後、アメリカのイエール大学、ウィスコンシン大学に留学。旧知の秩父宮が植有恒を世話役にアルプス登山をする聞き、滞在していたパリから一部合流。帰国後、ジャーナリストとして活動しつつ、その幅広い人脈と見識を国際交流の分野で發揮した。幼友達の白洲次郎に請われ、占領下で外務大臣となった吉田茂のブレーンとしても活躍したといふ。戦後は、親友であるロックフェラー3世の支援も受け、国際文化会館の設立に尽力した。

細川 譲立 (ほそかわ・もりたつ) 1883年～1970年

細川家第16代当主で、さまざまな文化事業の支援者(パトロン)であり、日本の文学・芸術に多大な功績を残した。描るきない信念と卓越した審美眼で国内外の美術品や民具まで蒐集した稀代の美術コレクターとしても有名。先祖代々の所蔵品とあわせ、彼のコレクションを伝承するため永青文庫を設立。1926年(大正15年)ヨーロッパ旅行中、パリの古美術商をまわる。その時、親交のあった植有恒から秩父宮のアルプス旅の話を聞き、パリから合流。登山隊には参加せず、グリンデルワルトからヴェンゲルンアルプ鉄道、ユングフラウ鉄道と乗り継ぎ、ユングフラウヨッホまでの旅を同行。再び、秩父宮一行とツェルマットの村で合流した。

麻生 武治 (あそう たけはる) 1899年～1993年

父が日本銀行の理事という資産家の家に生まれ、関西に暮らした幼少期には六甲山で登山に親しんだといふ。中学時代には富士山の登頂、早稲田大学在学中の1921年には槍ヶ岳の北鎧尾根を踏破した記録が残っているように、登山家としての顔をもつ。大学時代には陸上選手として活躍しており、箱根駅伝にも参加。早稲田卒業後スイスのチューリヒに遊学、1923年にはマッターホルン(ツムット穂)、モンテローザに登頂。関東大震災で一時帰国するが、すぐドイツ・ベルリンにいたプロイセン体育大学に留学。1925年には松方三郎とともにベルナーアルプスの山々に登頂。1926年の秩父宮アルプス登山にも一部合流している。1928年にはスイスのサンモリッツで開催された第2回冬季オリンピックに日本人として初出場。英語やフランス語、ドイツ語が話せることから通訳の役割も果たしたといふ。

藤木 九三 (ふじき くぞう) 1887年～1970年

京都府福知山市生まれ。1909年に東京毎日新聞社に入社後、やまと新聞に移籍、1915年から朝日新聞社の記者となる。1916年に、特派員として東久邇宮の槍ヶ岳登山に随行。1926年には秩父宮のアルプス登山に取材記者として同行。1928年には、サミュエル・ラヴァンド、エミル・シュトイリを連れて松方三郎とともに、アイガー・ヘルツルの初横断、1928年(昭和3年)には難関ルートとされる西山穂から槍ヶ岳の登頂に成功。帰國後、ジャーナリストとして活躍しつつ、その山体験を綴っている。著書に「たった一人の山」「山日 - アルプス回想」、訳書にエドワード・ウインバーの「アルプス登攀記」などがある。

